

TOTO

2014年 夏号

Toward a Creative
Architectural
Scene

通信

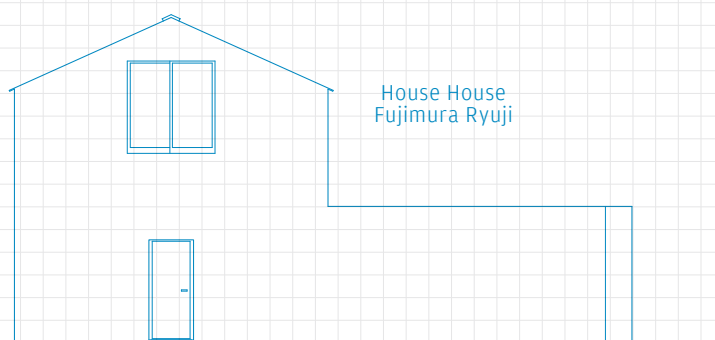
特集 / 家型
を読み解く

バナキュラーとしての建築言語か

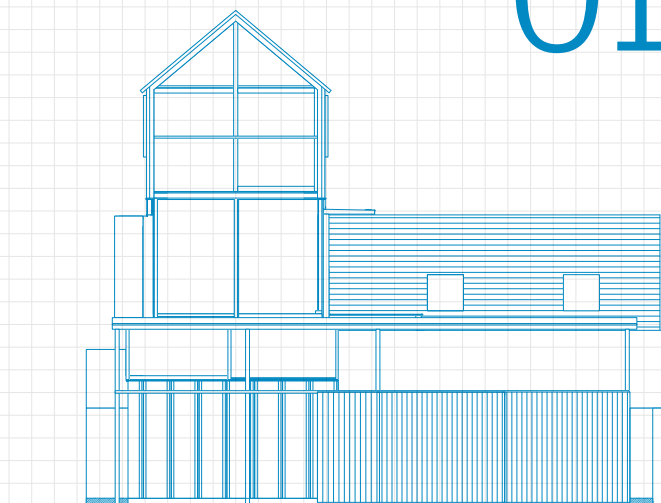
Special Feature
The House-shaped
House

Special Feature The House-shaped House

Case Study **01**



House House
Fujimura Ryuji



House in Ishikiri
Shimada Yo

1/150

Case Study **02**

雨や雪から身を守るため、住宅には勾配屋根がかけられることが多い。とりわけ、棟を境にふたつの傾斜した屋根面をもつ切妻屋根は、造りが簡単なためか、古今東西を問わず使われている。そのため、この切妻屋根は、まさに住宅をイメージさせる形態として、ときに「家型」とも称されるらしい。もともとは標準的な構法であり、バナキュラーな建築言語だろうが、「家」を表す記号として、軒を短くするなど、抽象化した使い方もある。さらに周囲に切妻屋根が多いことから、それに合わせるために「家型」にすることもあるそうだ。こうした、さまざまな理由で使われている「家型」を読み解いていくのがこの特集。

島田 陽+藤村龍至+吉村靖孝

4

「石切の住居」設計/島田 陽

10

「家の家」設計/藤村龍至

16

「CCハウス」設計/吉村靖孝

24

「33年目の家」設計/有山 宙+松原 慈

30

「House H」設計/篠崎弘之

38

シリーズ

旅のバスルーム90

文・スケッチ/浦 一也
ラ・トゥーレット修道院(フランス・リヨン郊外) 46

現代住宅併走26

文/藤森照信
「O邸」(増築)設計/大江 宏 48

最新水まわり物語35

地域密着型特別養護老人ホーム
「ここのか」 54

地域に生きる会社62

エサキホーム 58

TOTOギャラリー・間で
展示会をします

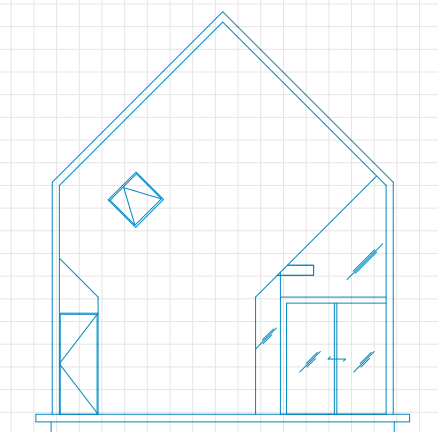
TYINテーネステュエ・アーキテクツ展
“Human - Architecture” 60

News File

TOTO News,
Cera Trading News, Books 62

Case Study

05

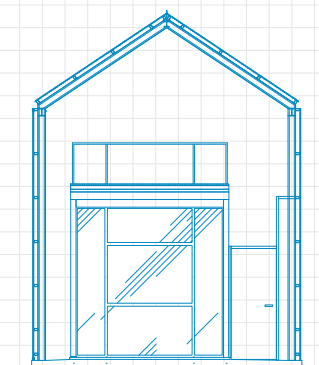


House H
Shinozaki Hiroyuki

Case Study

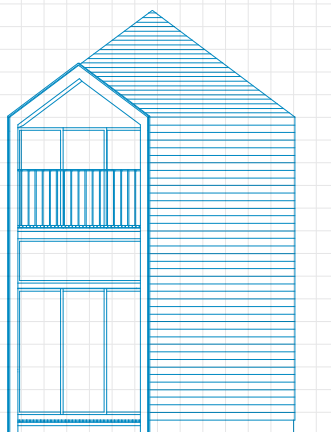
03

House of 33 years
Ariyama Hiroi + Matsubara Megumi



Case Study

04



Creative Commons House
Yoshimura Yasutaka

特集 / 家型を読み解く

バナキュラーとしての建築言語か

TOTO 通信

Contents

座談会

なぜ家型なのか

ケーススタディ / 01

土地の文脈から

ケーススタディ / 02

まさに家のような家

ケーススタディ / 03

建築の図面を売る もうひとつのプロタイプへの挑戦

ケーススタディ / 04

まとめは家型

ケーススタディ / 05

土間を分節する掘立て柱

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 503
Summer 2014

「TOTO通信」を
インターネットで
ご覧いただけます。

www.toto.co.jp

座談会

切妻屋根は桁に垂木や板をかける簡単な構造。
ただ切妻は、ときに「家型」とも称され、
屋根構造とは別の意味も付加される。
では、どんな意味があるのか。
異なる使い方をしている建築家3人に、
家型とは何か、あらためて聞いてみた。

まとめ／伏見 唯 写真／山内秀鬼



建築家

藤村龍至

Fujimura Ryuji

型なのか

建築家

島田 陽

Shimada Yo

建築家

吉村 靖孝

Yoshimura Yasutaka

Special Feature / The House-shaped House

Round Table

なぜ家

——切妻屋根はときに「家型」と称されます。本日は、その家型を、それぞれの使い方とて用いている3人の建築家に集まっていたいただきました。まずは、みなさんにとつて家型は、どういう存在なのでしょう。また、「石切の住居」(10〜15ページ)、「家の家」(16〜23ページ)、「CCハウス」(24〜29ページ)では、どのような経緯で家型を用いることになったのか、教えてください。

島田陽 「比叡平の住居」(2010)や「六甲の住居」(11)、そして今回の「石切の住居」などで家型を用いています。最初に家型を用いた「比叡平の住居」では、3つの理由で家型を採用しました。ひとつは、技術的にプリミティブな問題として、切妻屋根は簡単な納まりでローコストにつくれる点。また、風致地区なので、法規的にも勾配屋根にする必要があったこと。最後に、家型の親しみやすさ、精神の深いところに触れるイメージの力です。ここでは平屋の小屋のプロポーションを参照して少し拡大してつくことで、家の大きさを実際より小さく見誤らせることを試みました。そういった理由で家型を使いはじめ、家型の力に気づかされました。今回の「石切の住居」では、隣家が切妻の家型でしたから、それに揃えようと思いました。一般に家型には、さまざまな要素を強い形態でパッケージ化して統合する働きがあると思うのですが、複数の要素を等価に扱おうとした「石切の住居」では、むしろ家型の強い形態性を利用して、パーツのひとつとして用いることを試みています。

藤村龍至 私の出身大学(東京工業大学)の先生方、故・篠原一男先生、坂本一成先生、塚本由晴先生は、全員が家型の住宅を設計されていたので、すでにならうべきロールモデルがありました。大学院生ときに坂本先生の「家形を思い、求めて」を読み、とくに影響を受けました。「家形を思い、求めて」を追い求めて」という感じでしょうか(笑)。また東工大の出身者は、篠原先生の「白の家」(66)や、坂本先生の「散田の家」(69)などにならって、正方形平面で名作住宅をつくってきた流れもあります。そのため、家型や正方形平面は、自分のなかで、ずっと憧れていた存在だったのです。今回の「家の家」という住宅は、そのタイトルで示したように、家のような記号をもった家を目指しました。ある種の家の原型をつくりたいと思ったのです。これまでの住宅の設計のなかでも家らしさとは何か、ということはずっと考えてきましたが、今回ようやく、家らしい家を提案できる条件に巡りあえました。家らしさの表現として、家型の妻面を正面に向けています。

吉村靖孝 最初に誤解のないように言っておくと、「CCハウス」というのは、僕が設計した家型の案だけではなく、クリエイティブ・コモンズ(CC)を用いて図面を汎用、販売するプロジェクト全体の名前のつもりです。だから、「家の家」の図面を販売しても「CCハウス」ですし、僕が提案した連棟の家



型は、ひとつの例にすぎないのです。ただ、あの展覧会で見せた提案が家型であったことには、後から考えると、このプロジェクトにとって重要な意味があったと思っています。近代の分業化の過程で、住むことと建てることとが分離してしまっている状況があると思います。住まい手がつくり手になれなくなっている。そうした問題意識のもとで、建築家とつくる一品生産の住宅と、商品化住宅の間として、「CCハウス」を位置付けたかったのです。つまり、最終的には、図面はプロが配布するけれど、素人の住まい手でも自分で住宅が建てられるようにしていきたい、というもろみがあります。先ほど、島田さんが切妻、つまり家型は技術的に簡単に用いることができると言いましたが、僕もそれには同感で、「CCハウス」でも、住まい手がつくるからには簡単な技術でできるものを提供しなくてはならないと考え、家型を選択しました。家型は形態だけではなく、生産面でもプリミティブなものだと思っています。

プリミティブな建築言語

吉村 建築にとつて、家型は「結晶」みたいなものかと思っています。自然界では、物質を適切な状態に保つと結晶化していきますが、家型も建築生産のなかでの自然な結晶化の結果なのではないかと思っています。だから、家型はプリミティブな建築言語であって、それほど意識することなく用いられているのではないのでしょうか。先日、ホームページをつくるために、自分の作品を整理していたら、僕は家型とトンネルのどちらかしかやっていないことがわかった(笑)。コンテナを用いたプロジェクトもやっていますが、それはトンネル。方形屋根などの例外を除けば、建築には長辺と短辺ができて細長い形状になるから、トンネルも建築の原型だと思っています。そのトンネルに屋根をのせた家型が、最もプリミティブな家の形ではないでしょうか。

島田 今オーストラリアで仕事をしていて、クイーンズランド州の木造住宅群を見てきました。そこには木造住宅の屋根構造のタイプが5種類くらいに淘汰されていて、そこにも家型がありました。ただ、結局、方形屋根が生きていていっているように見えます。家型は妻側の水の処理が難しいですよね。自分で寄棟や方形を使ってみると、軒の出しやすさとか、合理性がよくわかります。ただ、寄棟だと逆に屋根のつくり方が少し複雑になるから、結局はプリミティブな切妻が使われる気持ちもわかる。さまざまな屋根形状ができながら、ひとつにまとまることなく、どれも生き残っている建築史は、設計をしてみると、まるで追体験するようによくわかります。

藤村 「家の家」では、妻面を正面として家型を見せていますが、屋根形式と

しては、切妻ではなく、三方が寄棟の片寄棟を用いています。寄棟の合理性と、切妻の正面性を両立することができる形式です。

吉村 こういう話をしていると、建築家の住宅が原理に忠実と聞こえますが、軒に関しては疑問符が潜んでいるかもしれません。建築家が設計する家型には、ほとんど軒がない。軒がない建築は原理に忠実とは言いつらいですよ。ヨーロッパ、アジア、アメリカなど、それぞれの地域で気候に合った構法があります。雨の多い日本では、本来、軒がなければならぬはず。建築家が家型を強調しようとして軒をなくしたデザインをしているのは、欺瞞かもしれません。

島田 ただ、限られたコストで設計をしているときには、十分な軒の出を確保しようとして、垂木を延ばしてまで、軒を出すのがよいのかどうかは考えてしまいます。「六甲の住居」では軒を出しましたが、垂木を用いずに、屋根材の波板だけで保持しようとしたので、300mmほどが限界でした。もっと軒を出した案も考えていましたが、あまり軒を出すと、慣習的な普通の家になりすぎてしまい、そのあたりの判断は難しかったですね。

藤村 せっかく人々の心情に触れる家型を用いるのだから、慣習的なものをつくらなくてはいけません。慣習的すぎると、建築家が設計する住宅として、あまりに批評性がなくなってしまうでしょうね。

吉村 雨をしのぐ性能は当然として、最近、耐候性のある外壁がいろいろと普及していますから、壁面の汚れはそれほど気にしなくてもよいかもしれません。そうすると、軒や庇の必要性は日射制御にあるわけですが、最近はいささか小さい窓が使われることが多いですから、日射の面でも軒はそれほど必要とされなくなってきたといえるでしょうか。

アイコンか、慣習か、はたまたハイブリッドか

みなさんの家型の使い方は同じではなく、少し異なる傾向があると思いますが、その点はいかがでしょうか。

藤村 私なりに、過去の作品を見る限り、吉村さんはアイコン操作、私は慣習操作、島田さんはその中間のハイブリッドだといえるのではないのでしょうか。私がどのように慣習を操作した家型の用い方をしているかといいますと、

Special Feature / The House-shaped House Round Table

家型は、技術的に
プリミティブなもの。
ただ、記号、
イメージとしての
力が強い。

Shimada Yo



たとえば、「家の家」では、梁や柱が横断する場所に窓を配置することで、一見すると慣習的に思える家型ですが、窓の位置は非慣習的なものになるようにしています。慣習をずらす操作です。こうすることで、施主や近隣住民としては、家型をすんなり受け入れられるし、建築家としても新しい形式に挑戦することができます。慣習を操作する意識は勾配にも現れています。アイコンを意識すると、明快な矩勾配になることが多いのですが、慣習を操作するうえでは、ときに3・5寸や6寸、4・5寸などの勾配を扱います。ロバート・ヴェンチュリーやホワイト&グレイのグレイ派に影響を受けると、こういう建築の見方を重要視します。その点、島田さんの「石切の住居」を見ると、矩勾配や田の字の窓を使うなど、アイコンを意識した傾向が見える一方で、家型を浮かすなど、慣習から離れようと操作しているようにも見えますが、いかがですか。

島田 そうですね。家型を慣習的に扱っていますし、アイコンにもしようとしています。ただ、矩勾配にしているのは、アイコンのためというよりは、急な勾配にすれば、棟の高さに対して、壁面の高さが低くなり、室内が人間にとって親密な寸法になると考えたからです。僕は、いつも聖と俗の間をいきたいと思っています。

吉村 僕が設計した「Nowhere but Sajima」(09)では、家型の穴があり、その形に機能的な意味は何もありませんから、家型記号です。「中川政七商店新社屋」(10)でも、大きな建物にもかかわらず周囲の住宅の形状を引用したつくり方をしましたので、家型をアイコンとして操作していると言われると、そういう側面もあるかとは思っています。ただ、単なる引用ではなく、「中川政七商店新社屋」の場合は、法規などとの組み合わせで勾配を左右に分けて操作することで、街並みのようなものをつくらうとしています。「Nowhere but Sajima」の場合もさまざまな形状の組み合わせで意味をもたせようとしているので、ひとつの家型という形状に意味を過剰に期待しているわけではありません。アイコン単体だと限界はありますが、アイコン同士の配列関係には、まだ可能性はあると思っています。形状と形状の関係とか、形状がくずれることによって、元の形状の意味を浮き彫りにさせる効果とか。

藤村 吉村さんの設計方法は、パラメトリックな手法です。アトリエ・ワンが、「ハウス・アサマ」(01)で二重の入れ子の距離を、内部の各室の大きさを定めることで決め、結果として変わる勾配を操作することで、屋根形状

が慣習的にならないように気をつけていたことを思い出します。ただ、最近
は「コモナリティーズ」と言っているように、人々のなかにある慣習を尊重
する考え方にシフトされました。

家型の先達

— 藤村さんは東工大の系譜のなかで設計を考えられているようですが、み
なさんは家型を用いるきっかけとして、何かを参照しているのでしょうか。

島田 とくに何も参照していません。なんとなく使いはじめました。「家型」
という言葉が定着しているとは知らず、最初は「小屋型」と呼んでいたくら
いです。後から、坂本先生が家型を研究されていることも知りました。ちな
みに、先日、坂本先生のインタビュー記事を読んでいたら、家型には意味が
まわりついて重たいので、もっと即物的に設計したい、と書かれていて、
自分も同じような思考の轍を踏んでいると思いま
した。坂本先生に同感で、やはり家型は意味が強
く、重苦しいですね。家型は技術的なことにも、
周囲のコンテキストに応えることにも、かなり簡
単に解決できる力がありますから、便利すぎるの
で、あえて封印して、別なことに挑戦したい、と
いう思いもあります。

吉村 僕は、家型を用いるMVRDVの出身です。
MVRDVは、“What you see is what you get.”
を標榜して、象徴的な意味を形態の背後に求める
ことを嫌っていました。だから、家型という形態そのものを課題ととらえ探
求することはありませんでした。そこで学んだものは大きいと思います。

また、先ほどのパラメトリックな設計の考え方は、MVRDVで染みついた
ものです。ただ、今はそこから離れつつあるとは思っています。

藤村 最初に言ったとおり、私は坂本先生の家型の考え方に影響を受けてい
ますが、坂本先生が家型を用いはじめた頃とは時代の状況が違います。当時
は、近代建築としてコンクリートの箱が普及する一方で、慣習的なものが依
然と根強く残っている時代でした。その慣習を無視せず、コンクリートの箱
に対するカウンターとして、ヴェンチュリーを参照しながら慣習を利用した
のが、坂本先生が家型を使う経緯だったかと思います。

島田 その後、坂本先生が家型からの解放を求めたように、慣習との距離は
近づいたり、遠のいたり、人それぞれに振幅があるのでしょね。設計者は、
そうした振幅のなかにつねにいるということでしょうか。



住まい手自身が
家をつくるためには、
家型くらい簡単な
構造が適している。

Yoshimura Yasutaka



藤村 そうですね。先ほどのとおり、塚本先生も、30代の頃は慣習的なもの
を避けていましたが、今はむしろどんどん近づいています。坂本先生のように
家型からスタートして、それをどんどんくずしていく方もいらっしゃいま
す。私としては、いろいろ試行錯誤したあげく、一度保守的なところに戻ろ
うとして、「家の家」を家型として設計しました。

場所と非場所、 そしてプロトタイプ

藤村 吉村さんが所属していたMVRDVの作風の背後にはオランダのお国
柄もあるかと思っています。山などが無いオランダでは際立った場所性がなく、
建築設計においては「非場所」にどう場所をつくるか、ということが日常的
な主題なのだろうと思っています。非場所のニュータウンで育った私も同じスタ
ンスです。「家の家」においても、隣に立っている
非場所の建売住宅と同じような材料や構法、コス
トだけでも、ちょっとだけ建築的な工夫をする
と、これだけ開放的な家がつくれる、というメッ
セージが重要だと思っています。「非場所」につい
ては、いかがですか。

島田 関西には「非場所」といえる場所は少ない
ですね。どんな土地でも、歴史がまったくないと
は僕は思わないですし、まして石切は豊かな場所
です。また、僕としては近隣の商品化住宅も場所
の一部としてポジティブにとらえたいと思っています。周囲を批判するとい
うよりも、周囲を統合するように考えていきたい。

藤村 関西には、歴史や地形が豊かな場所が多いということもありますね。
島田 正直、想像できないんですよね。藤村さんが「非場所」というほど、
何もない土地というのは(笑)。

吉村 「CCハウス」はまさに「非場所」。図面を売るだけで、どこに建つか予
想できないので、非場所というか無場所。どこに建つかわからない場合、僕
は単独なら家型、連続させるならトンネル、つまりコンテナ。積み重ねるこ
とも考えるとコンテナという選択になります。

日本の バナキュラーとして

——「非場所」あるいは「CCハウス」のようなプロトタイプを想定すると、やはり家型になるのでしょうか。日本の伝統建築では、蔵を除けば、家型が強調される妻入りより、平入りのほうが多いかと思えます。また、妻を見せる場合には、長野県の本棟造りなどのように、妻面を構えとして装うことも多いのですが、いかがでしょうか。

吉村 日本の伝統的な町家などは、壁を共有しながら連続して建てられていたので、平入りのほうが都合がよかったということもあるのでしょうか。後に隣家との共有壁がなくなると、建物が単独で建てられるようになり、隣地間に水を落とせますから、平入りではなく、妻入りで住宅がつけられていくようになったのでしょうか。

島田 確かに、ひしめきあつた家型の風景は、そんなに古くはないのかもしれませんが、心象としての家型も、歴史に沿った流れというより、あるときにつくりあげられたイメージなのではないかと。

藤村 では、われわれの時代における、ネオバナキュラーとしての家型は、「壁が独立している」ということと、「窓が小さい」ということが成立する条件だったのでしょうか。意外に単純な(笑)。

島田 妻面の構えについてはどうでしょう。家型はいかにも正面なので、方向性がはっきりしてしましますが、「家の家」ではポジティブにとらえていますか。

藤村 そうですね。周囲の条件を整理すると正面が決まったので、意識的に家型をそちらに向けています。しかも、堂々とシンメトリーに。

島田 「石切の住居」では、結果的にアイコン風に見えているのですが、構えとしてデザインしたというより、周囲の眺望が魅力的な場所なので、室内からの風景を優先しています。

吉村 オランダの市街地の古い建物は、ほとんど妻勝ちです。妻面が立ち上がった、後ろに屋根が隠れている。これは市街地が低地でフラットな地形で、高い位置から見下ろされないことと関係しているのではないかと思っています。道路からの視線が重視されているんですね。そのための構えです。看板建築ともいえますが。一方、ビルバオは土地の高低差が激しいので、屋根の瓦のパターンで遊んでいます。「グッゲンハイム美術館(97)」がああいった形をしているのも上から見られる視線があると思うと、納得できます。

Special Feature / The House-shaped House Round Table

家型のこれから

——これからも家型を使っていきますか。今後の期待とともに展望があれば、教えてください。

島田 「比叡平の住居」は樹脂を扱うアトリエが併設され、近隣の住民に受け入れてもらいたい状況があったので、家に見える家型はとても便利でした。家型のそういう力を利用したり、信頼したりしています。ただ、その力が異常に強いとも思っているのです、今後は気をつけたいと思っています。

藤村 家型には、コミュニケーション・ツールという役割もありますよね。ヘルツォーク&ド・ムーロンがそういう使い方をしました。「シャウラガー美術館」(03)だと、建物本体は大きなボックスですが、都市と接するところに小さな家型を置いています。ビッグネスとスモールネスを調停するようなものとして、手前に家型があると人々を安心させる。吉村さんの建築でも、コンテナの手前に家型を置くことよいのではないですか(笑)。

吉村 検討します(笑)。実際に「中川政七商店新社屋」では、住宅地のなかに1500㎡のオフィスや倉庫を建てなくてはならなかったのですが、コミュニケーション・ツールとして家型を用いたという経緯もあります。

島田 家型は、いろいろな取り組みがなされてきた形態なので、過去を客観視して応用できるところも、今後は重要でしょうか。

吉村 家型は「おうち型」でもあります。住宅の正しい歴史に依拠しているわけではなくて、みんなの心象風景とか、お絵描きや積み木でつくるような家との親和性も高いのです。そういったものが、住宅地の商品化住宅の流れを経由して、コンテクスト化していますよね。

藤村 坂本先生は、それを「機能性記号としての家型」と言っています。今は、その「機能性記号」がさらに記号化している状況で、歴史とはかけ離れた、二重三重の記号化が進んでいます。そうした多重性が家型の意味を重くしているのだと思いますが、70年代や90年代に先達がいるいろいろやったことを無視せず、その知性のうえに何かをのせたい。現代のあり方があるとすれば、70年代のようなカウンター的な慣習主義でもなければ、90年代のような即物的なアイコン主義でもない、それをうまくまとめたハイブリッドを模索していく、という感じでしょうか。

島田 ハイブリッド派の大勝利ということで、いいんですかね(笑)。

二重三重に記号化されている家型は、意味が重くなり、扱いが難しい。

Fujimura Ryuji





Shimada Yo

設計

島田 陽

土地の文脈から

大阪平野の絶景を見下ろす生駒山中腹に建てられた「石切の住居」は、建物の各部で異なる素材、色、形が採用されている。そこには土地の文脈を読み込んだ構成が、それぞれに現れているという。



01

Shimada Yo

前面道路側の正面。敷地は奥の東側から西側に向かって下がる斜面になっている。そのため、道路と接するガレージや玄関のレベルは地階。



寝室からの眺め

写真上／寝室から大阪平野の広がる西側を見る。ガラスの引き戸からデッキに出ることができる。

下／1階全景。コンクリートの高基礎の上に鉄骨造の家型がのる構造になっている。

リビング・ダイニング



奈良県と大阪府の県境に連なる生駒

山地の主峰・生駒山の中腹には、西側
の大阪平野の絶景を見下ろすことがで
きる住宅地がある。大正3(1914)

年の大阪電気軌道(現・近鉄奈良線)
の開通に伴い、大正から昭和にかけて、
沿線の生駒山周辺にはいくつもの住宅
地が開発されてきた。「石切の住居」は、
そうした住宅地のひとつである石切に
立ち、周囲には、古い住宅地とともに
樹齢を重ねた木々や旧家となじみなが
ら、斜面を蛇行する道や、急な坂、階
段があり、さらに山すその住宅の瓦屋
根越しに眼下に広がる大阪平野の眺望
が織りなして、豊かなランドスケープ
が出来上がっている。

さまざまな文脈を 読み取る

「石切の住居」は、歴史と環境の文脈

が豊かな生駒山中腹に立っているため、
島田陽さんはその文脈を読み取りつつ、
それぞれに対応しながら設計を進めて
いる。わかりやすいように、そうした
スタディの結果としてつくられた建築
の各部を先に述べてしまうと、島田さ
んの言葉をそのまま借りれば、「くすん
だコンクリート壁」「黒い家型」「白くて
背の高いフラットな屋根」「銀色の箱」
「半透明な片流れの屋根」である。さま
ざまな文脈があることを暗示している
かのように、異なる素材や色、そして
形を組み合わせることで、この住宅は
できているのだ。さて、それらはどの
ような文脈と、どのような対応の結果
から生まれたのであろうか。

まずは「くすんだコンクリート壁」。

石切は、傾斜地の古い住宅地なので、
そこには擁壁や塀に、古くからの石積
みやコンクリートブロック積みや石積
が散在しており、それらの壁の質感と調

Special Feature
The House-shaped
House

Case Study

01



Shimada Yo

和するように「くすんだ」表情のコン
クリート壁を打設したという。このコ
ンクリート壁は、基礎を立ち上げて構
造体とする、いわゆる高基礎であるが、
擁壁や上部の鉄骨柱の根巻きも兼ねた、
構造上の重要な役割を担っているうえ、

じんんでいるだろう。

この住宅の中心に鎮座しているため、
その表面の仕上げは、室内外を問わず
に風景の要となる。採用された小割り
のラワン型枠による壁面は、確かに「く
すんだ」表情を見せており、汚れたコ
ンクリートブロックや石の乱積みとな

この住宅は、その大きさの割に驚くほ
ど圧迫感がなく、斜面地にそっと置か
れたようなたたずまいである。

「くすんだコンクリート壁」と「黒い
家型」が、「石切の住居」の骨格をつく
りあげているが、道路および隣地との



東側外観



南側外観

写真左+下/東側の背面
外観。東側には黒いガル
バリウム鋼板大波板の家
型が張り出し、その下
には片流れの屋根が差し
かけられている。片流れ
の屋根面は透明板ガラ
スで、中には透光性
のあるポリエステル断
熱材が詰められている。



境では、また異なる顔を見せている。

前面道路側に対しては、鉄骨造の「白くて背の高いフラットな屋根」が、納戸および子ども室の「銀色の箱」やガラスを覆うように差しかけられている。これらを、薄いフラットルーフは現代的な表現、工事現場のような安全鋼板の箱は未来を示唆する表現といったように、多様な時間軸を感じさせる手法であると島田さんは説明する。また、上部のコンクリート壁や家型の形態が強く際立っているだけに、街並みに接する正面を、きっちりとしくりすぎず、構えを固くしつらえないことで、住宅と街とを軽く接続させることにつながる表現でもあるだろう。後方の敷地境界にある石積み擁壁側には、キッチンや浴室の上に「半透明な片流れの屋根」をかけている。新設のコンクリート壁を背にしながら、石積みの擁壁とのあいだをちよつとした坪庭とす

るための構成である。

こうしたいろいろな文脈から試行錯誤された建築の各部分が、その差異をより強調するような素材、色、形でつくられている姿は、建物単体で見ると、ときには統一感に欠けるようにも見えるかもしれない。しかし、そもそも歴史を重ねた街並みのなかで、街自体が多様なものの混在によって成り立っている状況では、「石切の住居」のような立ち方は、街の豊かさを取り入れながら、その豊かさに参加しているという点で、むしろより広い統一感を獲得しているといえるだろう。

パッケージ化しない

「石切の住居」の建主に、島田さんに設計を依頼した経緯をうかがうと、「島田さんに資料を請求したら、過去の作品介绍が無造作にクリップ留めで送ら

ゲストルームからの見通し



ゲストルームから1階のリビングとダイニングを見下ろす。奥の2階は寝室。寝室にある田の字の窓枠は手すりを兼ね、両側面では、アルミサッシの枠を隠す隠框にもなっている。

Special Feature
The House-shaped House

Case Study

01



Shimada Yo

れてきて、それがよいと思った」と言う。ハウスメーカーなどの、いわゆる大企業を検討していた際に、個人間の腹を割った付き合いがしにくいと感じていただけに、用意されたきれいなパンプレットではなく、手づくりのクリップ留めの資料は、逆に好感をもったのだそうだ。こうした建主と島田さんのやりとりから、「石切の住居」の各部の多様性における、街並みとの統一感とは別の側面を考えてみたい。

建主が企業に感じていた危惧は、商品として完成されすぎていると、品質が保証された商品を選ぶことはできても、ものづくりの中身に買い手が参加できない、という感覚なのではないだろうか。企業としては、専門的なものづくりの工程をパッケージ化した全体像を示すことで、買い手に品質の保証された銘柄を提供しているわけで、利点も多いが、別の選択肢を望む建主もいる。そういう視点で、あらためて「石切の住居」を見ると、銘柄を明快にするために建物の意匠にも統一感が望まれやすい商品化住宅とは違い、各部がそれぞれの理由でデザインされているわけだから、パッケージからは解放された構成になっている。「和風」などの建主と共有しやすい建築言語は、形式的な建物の再生産には功を奏すだろうが、多様な文脈の一つひとつ対応していかなくてはならない状況では、意味合いや枠組みが大きすぎる場合もあるだろう。パッケージ化した全体像は、ときに不要である。

「石切の住居」は、周囲の文脈を読み



浴室・洗面室・キッチン

子ども室

写真左/東側の差しかけ屋根の下にある浴室、洗面室、キッチン。断熱材を透過した光が落ちている。

右/安全鋼板の箱と庇のあいだにガラスをはめ込み、子ども室にしている。

込んだものづくりの論理が、形となって各部に現れている。それは、きれいなパンプレットではなく、クリップ留めの資料の提供によって、結果的に設計者と建主の心がぐつと近づいたように、住まい手が街並みの豊かな文脈と、ほどよく付き合い合うことにもつながっていくのではないだろうか。

島田さんは、「比叡平の住居」(2010)、「六甲の住居」(11)など、これまで設計してきた住宅に「住居」という名称を付している。「家」や「住宅」よりも、建主がポジティブに住みこなしている印象が強い、と感じているために、「住居」を用いているのだそうだ。場所と人を結びつけることが目指された、名づけである。

「石切の住居」

建築概要

所在地	大阪府東大阪市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	島田陽/タトアーキテツツ/ 島田陽建築設計事務所
構造設計	S ³ Associates
構造	鉄骨造
施工	ヒロタ建設
階数	地下1階 地上2階
敷地面積	215.11㎡
建築面積	99.37㎡
延床面積	133.53㎡
設計期間	2010年5月~2012年4月
工事期間	2012年7月~12月

おもな外部仕上げ

屋根	ガルバリウム鋼板大波板 t=0.4mm
外壁	ガルバリウム鋼板大波板 t=0.4mm 鉄筋コンクリート打放し
開口部	アルミサッシ 木製引戸
外構	モルタル 金ごて仕上げ 真砂土

おもな内部仕上げ

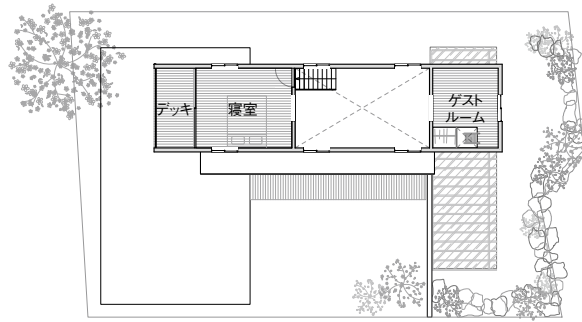
子ども室	
床	シナ合板 t=4mm オスモウッドワックス
壁	シナ合板 t=4mm 素地
天井	シナ合板 t=4mm EP
リビング・ダイニング	
床	モルタル 金ごて仕上げ t=30mm コンクリート保護剤塗布 構造用合板 t=24mm+ ナラ無垢フローリング ヘリンボーン張り t=18mm
壁	鉄筋コンクリート打放し ラワン合板 t=6+6mm EP
天井	ラワン合板 t=6+6mm EP
キッチン	
床	モルタル 金ごて仕上げ t=30mm コンクリート保護剤塗布
壁	鉄筋コンクリート打放し ポリカーボネイト複層板 t=10mm
天井	ポリカーボネイト複層板 t=10mm
浴室・洗面室	
床	モルタル 金ごて仕上げ t=30mm コンクリート保護剤塗布
壁	鉄筋コンクリート打放し
天井	ポリカーボネイト複層板 t=10mm
寝室	
床	桐無垢フローリング t=12mm
壁・天井	ラワン合板 t=6+6mm EP
ゲストルーム	
床	桐無垢フローリング t=12mm
壁・天井	桐合板 t=9mm

平面図

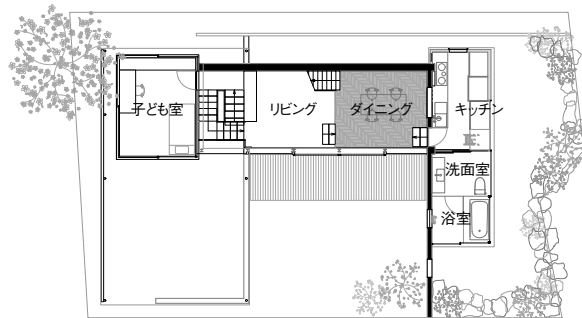


0 2 4m

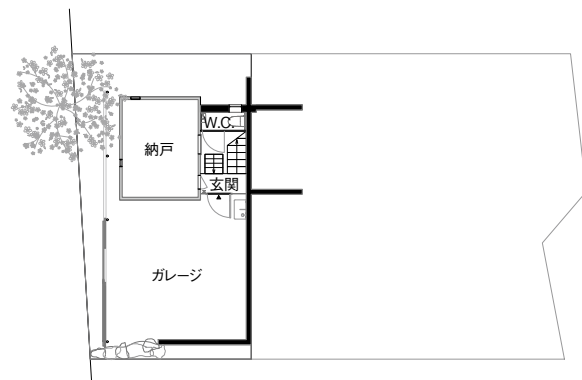
1/300



2F



1F



B1F

断面図

0 2 4m

1/300



しまだ・よう/1972年兵庫県生まれ。95年京都市立芸術大学美術学部環境デザイン科卒業。97年同大学大学院修士課程修了。99年タトアーキテツツ/島田陽建築設計事務所設立。おもな作品=「タトハウス・北野町の住居2」(2008)、「二子新地の住居」(10)、「六甲の住居」(11)など。



Fujimura Ryuji

設計

藤村 龍至

まさに家のような家

東京郊外の新興住宅地に建てられた住宅。「家の家」というタイトルは、設計を通して、郊外の「家」のあり方に批評を加えようとする意欲の現れである。郊外住宅に対する藤村龍至さんの提案を読む。



敷地は、農地転用を経てつくられた東京郊外の新興住宅地の角地。西側に正面となる家型の構えが向けられている。右側にも扉があり、自転車置場を経て、庭につながっている。

Case Study

作品

「家の家」

02



Fujimura Ryuji

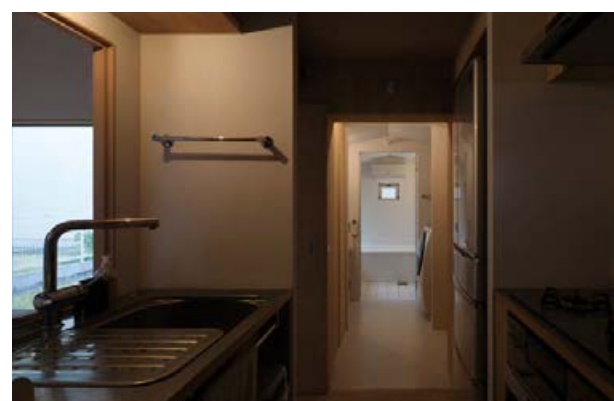
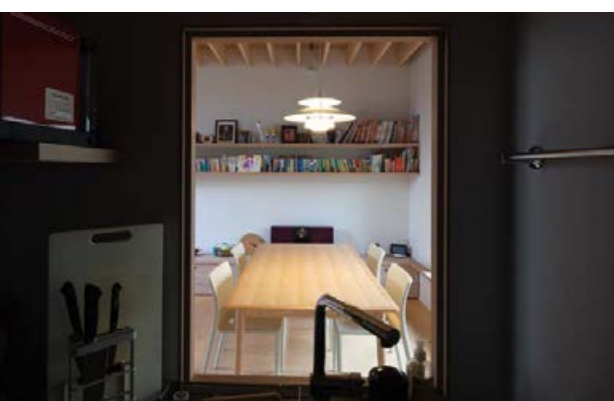
1階主室

芯々6,000×3,850mmという
同じ大きさの
主室と南庭が対面

1階のリビング・ダイニングに相当する「主室」から南の庭側を見る。庭とつながる大きな窓は掃出し窓ではなく、腰窓。室内側には腰かけが設けられ、むしろ庭との距離が縮まっているように感じられる。



写真右／南北に連なるクローク、玄関、キッチン、浴室は扉を開けると見通すことができ、家事動線の軸線を生み出している。左／キッチンのシンクからダイニングテーブルを見る。家事動線と直交する軸線。





Special Feature
The House-shaped
House

Case Study

02



Fujimura Ryuji

写真右／玄関から主室を見る。中央にスチールの無垢のポスト柱(60mm角)がある。1階から棟まで貫通する棟持柱になっている。左／主室から北の道路側を見る。窓が高窓になっており、道路からの視線を遮断するとともに、駐車場の車が室内から見えないようになっている。



まるで倉庫のような家Ⅱ「倉庫の家」(2011)、まるで小屋のような家Ⅲ「小屋の家」(11)に続いて、まさに家のような家Ⅳ「家の家」(12)と名づけられた住宅がつけられた。

立地は、東京郊外の、農地転用によって生まれた新興住宅地の一画である。周囲の区画には、敷地の北側に建物を寄せ、南側に庭をとり、建物には勾配屋根をかけた、典型的な木造2階建ての住宅が並び立っている。すべてを同じメーカーが建設したわけではなくとも、似た条件のためか、同じような住宅が顔を揃えている。そうした街並みには、統一感や清潔感があり、ひとつの住宅でそれらを台なしにするわけにはいかないであろうが、一方で建築家としては周囲に付和雷同せず、状況を検証したうえでのもづくりが、同時に求められるだろう。その点、「家の家」もまた、周囲の「家」との調和を図りながら、慣習的な「家」を批判的に継承しようと試みた住宅である。

設計のプロセス

設計者の藤村龍至さんは「超線形設計プロセス」(22ページ)という設計の方法論を提唱している。これは、いくつかの設計案を何度もゼロから生み出すのではなく、スタディをしながらか徐々に最終形態に一步步近づいていく、一方通行の「線形」的な設計方法である。具体的には、設計の過程で随時リサーチを挟みながら、既存案に対して批評を加えることで新案をより

前進させる、という工程を何案も繰り返すもの。藤村さんは、建築家の設計過程のなかには論理的な飛躍が含まれていることが多いと指摘しており、設計行為を論理的な思考の連続としてあらためてとらえ直そうとしているのだらう。また、この設計方法は、何案も

の模型や図面が、初期案から最終案に徐々に変化していく過程を見せる、藤村さん特有のプレゼンテーションにもつながっている。これまで発表してきた建築作品において、藤村さんはこの「超線形設計プロセス」による説明を貫いてきたが、「家の家」においても、例にもれず、この手法を用いている。

まず、初期案では、敷地形状に合わせた陸屋根の箱型が想定されていた。周囲の家と同様に、駐車場の際まで建物を北側に寄せ、残った南側を庭としている。ただし、この案に対しては、庭が扁平になってしまふなどの理由から「内部、外部ともに使いきれない」という、自身による「批評」が加

開口部は通常の1階の開口部と合わせ、開口部を軒下などに設けたら、軒下の位置を異ならせた外観。開口部は通常の1階の開口部と合わせ、開口部を軒下などに設けたら、軒下の位置を異ならせた外観。開口部は通常の1階の開口部と合わせ、開口部を軒下などに設けたら、軒下の位置を異ならせた外観。



えられ、次案以降に展開されている。解決案として提案されたのが、ひとつの大きな箱型とするのではなく、「メインボリューム」と「サブボリューム」に分けた案で、南東にほぼ正方形の庭を確保できている。このあいだに、建主から部屋を増やしたいという要望があり、さらに「メインボリューム」が調整の結果、ほぼ正方形になっていったことから、内部を動線と室数に対応する田の字型の平面としている。また同

時期に、街並みとの調和などのリサーチから、三方に軒を出しながらも、正

Special Feature
The House-shaped House

Case Study

02



Fujimura Ryuji

面性の強い家型の妻面を見せることができる、片寄棟の屋根を採用している。このように案がどんどん変化していき、この時点でおおよそ現状の平面が出来上がっているのがわかる。

続いて、細部の調整段階に入ると、設備や動線の配置が整理されるときもに、寸法の整理が行われている。大枠の検討の際に、すでに「メインボリューム」の大きさがおおよそ6000mm角だったことから、各部の寸法を6000mmと、それを分割した3000mmと2000mmなどにまとめていく。その結果、やや狭かった庭が広くなるこ

とで主室と庭の大きさが同じになり、田の字型も等分割になるなど、形式性を帯びた平面構成が出来上がっている。こうした、初期案を変化させながら、最終案にたどり着こうとするプロセスは、無駄を廃した効率主義ともとらえられるかもしれないが、建主や社会に対して雄弁に建築を語ろうとする設計者の信念が現れたものでもあるから、深い思考を避けた怠惰な効率主義とはまったく無縁な、むしろ個を超えたところでの思考の深化への挑戦であろう。

紡がれた形式

藤村さんによる「家の家」の設計プロセスの説明を聞いてみると、藤村さんの提唱する「超線形設計プロセス」の、ある重要な側面が見えてくる。それは、藤村さんが言うには、「形式は、当てはめるものではなく、生成されるもの」という点である。

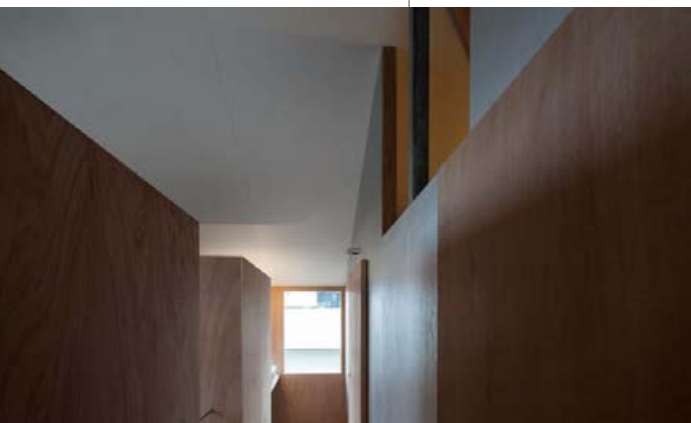
たとえば、6000mm角という大きさにあって、7000mm角だと広いので平面、5000mm角だと狭いので断面の検討の重要性が増すが、6000mm角は平面と断面の両者が拮抗した緊張感のある寸法になる、という平面寸法のある種の形式に、藤村さんは自ら到達している。この住宅の設計が終わり、オープンハウスなどでほかの建築家と話をしたところ、同様に感じている人が多かったという。藤村さんの師にあたる塚本由晴さんが、「アニハウス」



慣習的な
家型の表面に
窓の配置で工夫を
与える。

2階廊下

2階の廊下から壁面と天井面を見る。どちらもラワン合板。藤村さんによると、高級な印象のシナ合板を避けたのだという。天井は白く塗られ、壁の構成を際立たせる地となっている。



(1998)などで昔から実践していた寸法でもあるらしい。

この寸法に限らず、藤村さんは「家の家」において、田の字型、片寄棟、棟持柱、シンメトリー、等分割などの、建築言語としてはすでに定着している形式を用いているが、それらは最初から形式に当てはめているわけではなく、試行錯誤するうちに、その形式に至ったのだそうだ。

これは、形式の有意義性を発見したうえで、その形式を結果的に採用しているのであり、いわば「形式の再生産」といえるだろうか。建築史を見ても、一度形式化されたものは、「形式の墨守」の潮流もあいまって、もともとの形式の意義が忘れられ、形態だけが独り歩きしてしまいがちである。そうした傾

向は、社寺建築などで時を超えた形態の再生産が求められる場合には、式年遷宮よろしく、むしろ計りしれない意味をもつが、機微の対応が求められるであろう現代の住宅設計においては、本来の自由を阻害する融通のきかない足枷になりかねない。藤村さんの設計方法は、従来知られていようといまいと、形式を自ら生成するものであり、昔からの建築言語や形式にも再び血を通わせる可能性があるのではないだろうか。

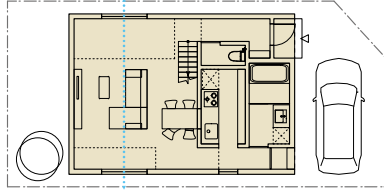
「家の家」というタイトルは、単なる修辭的な同語反復ではなく、「家」には見えない住宅もたくさんあるなかで、汎用を視野に入れながら、郊外に立つ「家」の形式の再生産を試みた強い意志が込められているのだろう。

1/300
0 2 4m

超線形設計プロセスによる設計過程

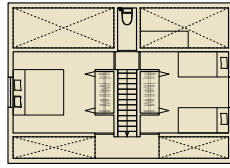
建主との対話、調査、
自身への批評を経て、
最終案に至る。

1F平面図



東西の抜け

2F平面図



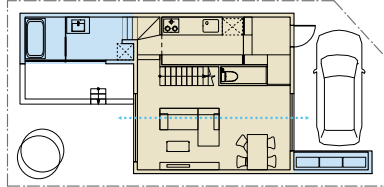
シンプルな箱形の
ボリュームを、
北に駐車場、
南に庭を残して配置。

004 案

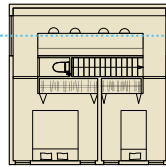
2011年6月4日



1F平面図



2F平面図



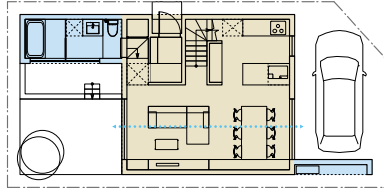
004案では、
内部・外部ともに
使い切れていないとの
判断で、
ボリュームを調整。

006 案

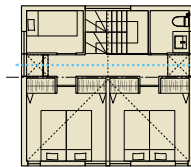
2011年6月11日



1F平面図



2F平面図



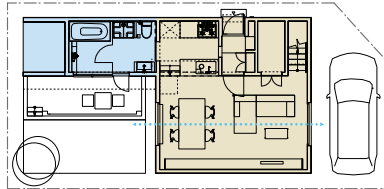
室数を増やしたい
という建主からの
リクエストを受け、
2階を田の字型に。
屋根も片寄棟になる。

010 案

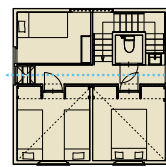
2011年7月9日



1F平面図



2F平面図



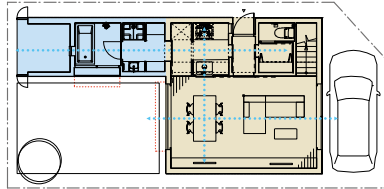
寸法を
6,000mmなどに揃える。
サブボリュームを
南西側に集約し、
整理する。

018 案

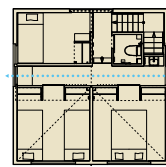
2011年11月4日



1F平面図



2F平面図



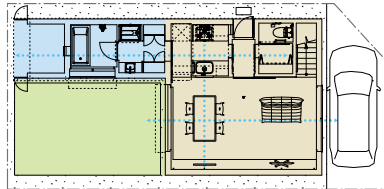
北側の駐車場を
最小限のスペースと
することで、庭を大きく。
西側の家事動線を
一直線に。

024 案

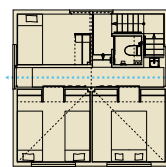
2012年3月16日



1F平面図



2F平面図



主室と庭を
同じ面積にするなど、
等分割や対称を
用いることで
明快な平面構成へ。

025 案

2012年4月9日



「家の家」

建築概要

所在地	東京都
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	藤村龍至／藤村龍至建築設計事務所
構造設計	木下洋介構造設計室
構造	木造在来工法
施工	泰進建設
階数	地上2階
敷地面積	108.01㎡
建築面積	48.90㎡
延床面積	84.27㎡
設計期間	2011年3月～2012年4月
工事期間	2012年4月～11月

おもな外部仕上げ

屋根	ガルバリウム鋼板 豎はぜ葺き
外壁	モルタル リシン吹付け
開口部	アルミサッシ
外構	芝 砂利敷き

おもな内部仕上げ

キッチン・脱衣所・トイレ	
床	長尺塩ビシート
壁・天井	PB t=12.5mm EP (脱衣所の天井は、 珪酸カルシウム板 t=6+6mm VP)
浴室	
床	150mm角磁器質タイル
壁	モルタル UE
天井	珪酸カルシウム板 t=6+6mm VP
主室	
床	IOC パーテクリアオイル t=12mm
壁	PB t=12.5mm EP
天井	SPF材 OS
室1・2・3	
床	ラワン合板 t=9mm OS
壁	ラワン合板 t=9mm OS PB t=9.5mm EP
天井	ラワン合板 t=9mm SOP

ふじむら・りゅうじ／1976年東京都生まれ。2002年東京工業大学大学院修了。02～03年ベルラーヘ・インスティテュート(オランダ)。03～08年同大学大学院博士課程。現在、東洋大学専任講師、藤村龍至建築設計事務所主宰。おもな作品=「BUILDING K」(08)、「家の家」(12)、「鶴ヶ島太陽光発電所環境教育施設」(14) など。

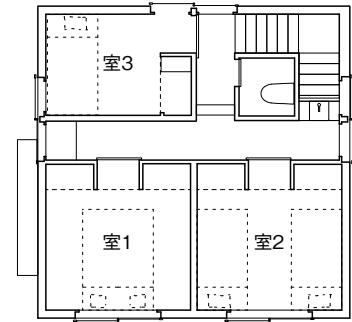


Fujimura Ryuji

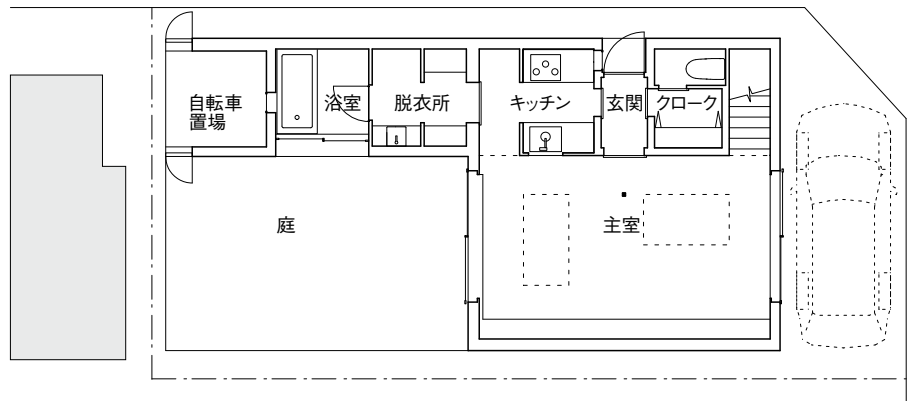
平面図

1/150

0 1 2m



2F

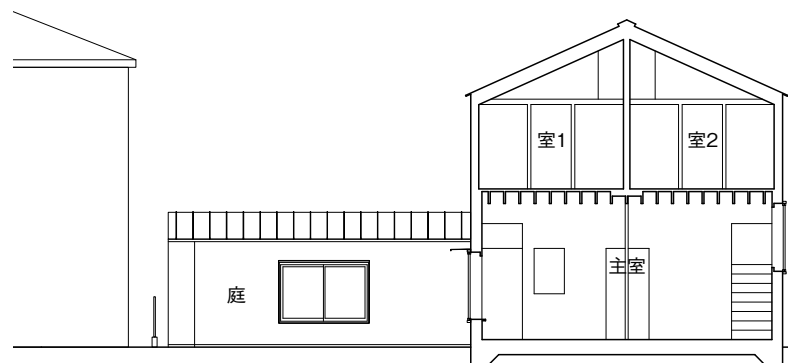


1F

断面図

1/150

0 1 2m





Yoshimura Yasutaka

設計

吉村靖孝

他人の建築をまねて設計をしてはいけないのだろうか。図面をコピーしてそのまま使ってはいけないのだろうか。そうした疑問とともに、吉村靖孝さんは「CCハウス」というプロジェクトを立ち上げた。



Case Study

作品 「CCハウス」

03

建築の図面を売る ——もうひとつの プロトタイプへの挑戦

「CCハウス」は図面を売るプロジェクトの総称。この絵では、その「CCハウス」によって配布された図面をもとにつくられた家が、数軒立ち並ぶ街の風景が描かれている。プロジェクトは2010年に開始されたが、こちらは2014年の最新案。



建築物ではなく、図面を売る、という仕組みが「CCハウス」である。なぜ建築家である吉村靖孝さんは、図面の販売に着目したのか。「年間何十万棟もの住宅が建設されているのだから、すべてが違う図面で作られなくてもよいのではないか」という素朴な疑問とともに、吉村さんの法学への深い関心と、建築物を巡る著作権に対する問題提起がかかわっている。なぜ、法学や著作権が図面の販売と関係するのか、少しずつひも解いていきたい。

クリエイティブ・コモンズ・ライセンスを導入

吉村さんは、法学者ローレンス・レッシングの著書『CODE——インターネットの合法・違法・プライバシー』（翔泳社）に強い影響を受けている。た



たとえば、インターネットをはじめとした高度な技術をもった社会における「コード（アーキテクチャ）」の重要性に共感を覚えたそう。インターネット上には、実社会での法規と同じくらしいの規制力をもつ仕組みとして「コード」があるという。その建築への応用として、吉村さんは「デ・コード」というフィールドワークを行ってきた。これは、法規を踏まえて、都市や建築を読み込むことで、その形成過程を観察する試みであり、その結果は「超合法建築」と名づけられた、法規をまじめに守ったうえで、周囲とは違う魅力を備えた建築物の発見にもつながっている（『超合法建築図鑑』吉村靖孝著、彰国社）。

この「デ・コード」の活動から、吉村さんの法規から建築を解剖する目線はよく知られることとなったが、続いて吉村さんは、レッシングが提唱する「クリエイティブ・コモンズ（CC）・ライセンス」という概念にも着目した。これは、インターネットの秩序のために、レッシングが「コード」のひとつとして提案した著作権のルールであり、作者による著作権の適用範囲の意思表示である。従来、著作権には、すべての権利を主張するか、すべての権利を放棄する、というふたつしか選択肢がなかったが、CCライセンスでは、クレジットを明記した再配布を許可したうえで、非営利や改変禁止などの条件を設定することができる。その条件は「コモンズ証」というわかりやすい記号で表示できるようになっており、イン

Special Feature
The House-shaped House

Case Study

03



Yoshimura Yasutaka

建築物の著作権

「第五十二條 本法ハ建築物ニ適用セス」——明治32（1899）年に日本最初の著作権法が制定されたとき、建築物はその適用から除外されていた。建築は他人のまねをしてもよい、という特例である。その理由は、西洋建築にならうことの多かった当時の日本建築界において、「外国ノ建築物ヲ利用スルノ必要アル」（水野鍊太郎）とされた

ターネット上のみならず、紙媒体の出版物にも採用されはじめている。この概念の画期性を受けて、吉村さんはCCライセンスの建築への導入を検討したのであるが、吉村さんのもとと考えていた建築物の著作権に対する問題提起が、その導入への意志を後押ししたという。



2010年の「CCハウス展」で展示された模型

CCハウス 2010

2010年のプロジェクト開始時は、木造在来構法で作られた2棟の家型を階段棟でジョイントするものだった。どこに建つかかわらないので、窓の位置を決められない、ジョイント部に施工上の不安がある、などの点で改善案が求められていた。

時代性のためでもあった。後の法改正によって建築物の著作権も認められているが、吉村さんの問題意識は、そもそも建築物は現行の著作権法と相性が悪いのではないかと、というものだった。建築物は、建主や施工者などの複数の人間とのチームでつくられるうえ、設計者自身も、師匠や先輩から指南を受けるなどのさまざまな経験を踏まえて設計行為をしているため、ひとりの人間の個性だけでは建築物はできていない、という主張である。しかし、多くの創作性をはらんでいるわけだから、旧著作権法のようにまったく著作権がなくてもよいとも踏みきれないだろう。白か黒か、という議論ではなく、グレーを想定する必要がある。こうした吉村さんの問題提起が、まさにCCライセンスとうまくかみあったのである。グレーを想定する、ということは自身の設計の一部の著作権を放棄して、世の中と同じものが広まることを許可するということである。建築物は、建築物そのものを見ただけではコピーできない。そのため、CCライセンスを表示した図面を配布、販売することとし、その考え方が、「CCハウス展」（オリエアートギャラリー、2010年）



どこに
建てられたとしても
成り立つ窓の
配置とは

↑内観

画像上／リビングから階段、キッチンの方向を見る。隅に大きな開口部ができるので、室内は明るくなる。

下／親戚などで隣り合う2棟を計画する場合、隅の庭を共有した配置にすることもできる。

↓庭



画像右ページ上／2014年に新たに考えられた新しい「CCハウス」の案。矩形の建物のコーナーを斜めに削ぐことで開口部をつくっている。室内にL字の開口部ができる。

下／矩形の寄棟屋根の隅を削ぐと、切断面は家型になる。その切断面のデッキから隣家を見る。

↓外観





Yoshimura Yasutaka

じつは、「CCハウス」は建築生産の制度面の挑戦であるとともに、吉村さ

責任の所在、 そして これからの展開

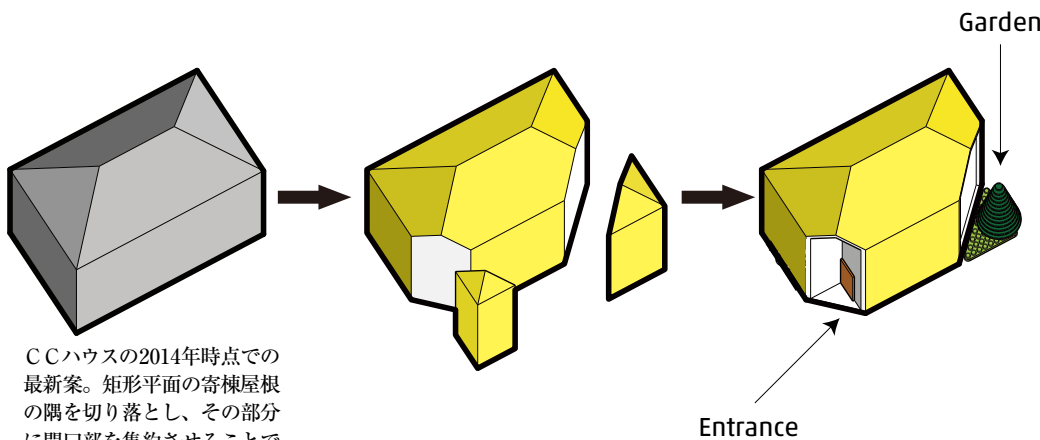
この展覧会をきっかけに、建築物の著作権の議論がなされ、大きな意義をもったが、実際の図面販売においては、吉村さんは図面を描いた人間の「責任」という壁にぶつかることになったという。

んには建築の質の変化に対する期待もあった。それは、図面の購入者が、その図面を改変し、その改変内容が販売者にフィードバックされることで、積み重なれば不特定多数の人々がかかわった匿名性の高い図面や建築物ができるのではないかと、という期待である。いわば、本来は建築家がたどり着くことはできないはずの「建築家なしの建築」のようなバナナキュラーな建築を目指したのである。

一方で、建築設計には当然ながら、機能面や安全面などのさまざまな点で、つくり手の「責任」が生じるが、そうした事柄の匿名性はどうしても得られなかったという。原作者の意図を超えて、どんどん図面が展開していったとしても、原作者の生産物に対する責任は法的に排除できないのだそうだ。もし仮に全国から多くのクレームが寄せられたときに、それに対応できるだろうか。あまりにハイリスクである。この点を解決することは難しく、このプロジェクトは一度停止している。

ところが、2014年、再び「CCハウス」は動き出した。それは、吉村さんが販売した図面に対して責任を担う決意をしたことと、図面の内容や、

CC House 2014 Entrance Garden



CCハウスの2014年時点での最新案。矩形平面の寄棟屋根の隅を切り落とし、その部分に開口部を集約させることで、敷地内の奥まったところに窓ができる。どこに建てられても成り立つ窓の配置として考案された。

売り方を吟味することで、リスク回避もできるという目算があつてのことのようだ。図面の内容については、たとえば当初案では、敷地が未確定のため、窓の位置を特定できなかったが、新案では、敷地境界から引っ込んだ位置に窓が集約される工夫をしている。また2棟ではジョイント部分などに不安があるため、1棟案にあらためるなどの

変更がある。売り方については、「図面」ではなく、「図面がのった「電子書籍」を上下巻本として販売することを検討しているという。上下巻本であれば、各巻は1棟分に相当しないし、いわば設計資料集となり、使用者の責任で図面を取捨選択することができる、という筋書きとのこと。

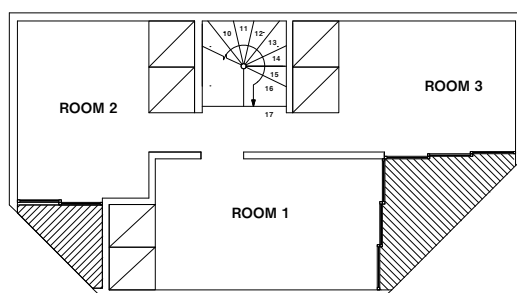
現代の設計の参考書は、ほとんどが事例集、ないしは作品集であるが、吉村さんがつくりとうとしているのは、はじめから普及を自覚してディテールまで配布する図面集である。思えば、江戸から明治期にかけて、日本では数多くの汎用可能な建築の雛形本が出版されていた。現代では「雛形」という言葉自体、建築業界ではあまり使われないうが、当時は意匠、構法、絵様、彫刻までさまざまな種類の雛形本があり、一時代の建築文化の基底にあつた重要な出版物だっただけでなく、もちろん「CCハウス」が雛形本であるというわけではないが、社会のなかで共有すべきことを直視している点で、大きすぎて目をそむけてしまいうる「時代」とか「文化」に、かわわっていく流れになるのかもしれない、と頭をよぎる。

「CCハウス」

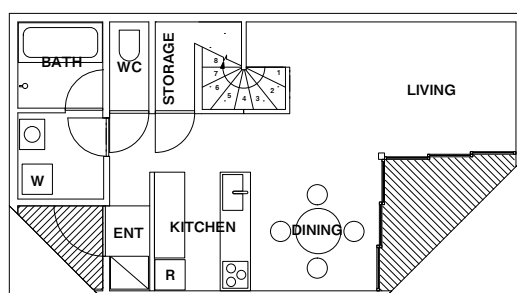
平面図

1/150

0 1 2m



2F



1F

立面図

1/200

0 1 2m



Yoshimura Yasutaka

よしまら・やすたか／1972年愛知県生まれ。95年早稲田大学卒業。97年同大学大学院修士課程修了。99年文化庁派遣芸術家在外研修員としてMVRDV在籍。2001年吉村真代、吉村英孝とともにSUPER-OS設立。02年同大学院博士後期課程満期退学。05年吉村靖孝建築設計事務所設立。13年明治大学特任教授。



CCハウス最新案によって構成された街並みのイメージ。

設計

有山 宙 + 松原 慈

Ariyama Hiroi + Matsubara Megumi

東大寺境内脇のこの敷地では
条例により屋根形状に制限があった。
複雑な室の構成を
まとめ上げているのが「家型」。



写真右/室内は、木造の3つの箱が、連結される構成。エキスパンションジョイントで、それぞれが構造的に独立している。左ページ/前面道路側の西側正面。軽い鉄骨のフレームの中に、木造の3つの箱が置かれている。鉄骨フレームの屋根は、エキスパンドメタル部分と、屋根材のない部分がある。そのため、敷地の奥と手前の箱の外は、半屋外である。

まとめは家型

Special Feature／The House-shaped House

Case Study

04

Ariyama Hiroi





写真上／居間・キッチン
の箱の上部の屋根。フィ
リップ・ジョンソン設計
の「ゴーストハウス」(19
84) のオマージュである
オブジェが置かれている。
下／敷地奥の東側から建
物を見る。屋根がない部
分も鉄骨フレームが家型
を形成している。



どれほど小さな建築でも、それが構
想されるに至るには、背後にいろい
ろな欲求、思考、方法があり、満たすべ
き多くの前提や条件がある。それらは
必ず多様で矛盾に満ちている。しかし、
結果として出来上がった建築がそうし
た多様性、混沌、不整合をあからさま
に表現していることはほとんどない。
それではひとつの建築としてのまとま
りがつかなくなってしまうからだ。建
築設計者の役割は、多様性のどこかに
焦点を絞り、混沌を整理し、不整合に
筋道を与えることとみなされている。
そうして初めて、ひとつの建築として
のまとまりが達成されるのであると。
こうした通念を痛快に覆す住宅があ
る。延床面積100㎡あまりの「33年
目の家」がそれだ。

開放的な家型

敷地は奈良・東大寺の境内に接して

いる。その昔は境内に含まれていて、
工事に先立ち文化庁の発掘調査が行わ
れた。春日山風致地区であり、市街化
調整区域でもある。条例により、配置
容積、外形の素材、形状、色彩などに
規制がある。防火指定免除という特典
もある。

屋根の形状は切妻、
方形、寄棟のどれか
でなければならず、
片流れは許されない。
幅6m、奥行き30m
の敷地形状から、切
妻の選択が妥当だっ
た。勾配は急すぎて
もゆるすぎてもダメ。
いわゆる家型に必然
的に誘導される。

Special Feature
The House-shaped
House

「33年目の家」の外形もまさに家型そ
のもののだが、条例が想定している
だろうバナキュラーな姿とは天地ほど
異なっている。構造は5mワンスパン

Case Study

04



Ariyama Hiroi

の鉄骨の家型フレームが3・85mお
きに7列並び立ち、桁行方向は軒梁と
ブレースからなっている。構造体はす
べて露出している。屋根は波型ガルバ
リウム鋼板とチタン亜鉛合金のエキス
パンドメタル、壁も同じ材料のほか、
中空ポリカーボネ
イトが多用されて
いる。屋根も壁も
一部は張られてい
ない。落ち着いた
たたずまいの瓦屋
根と白壁の外形が
期待されていると
すれば、「33年目の
家」の家型の外形
はその対極にある。
堅固な閉じたシエ
ルターではなく、薄
く、軽く、開放的。
設計者の一人であ
る有山宙さんが傾
倒するオーストラ
リアの建築家グレ
ン・マーカットの影
が認められる。さ
らには、ひらひら
と華

奢で浮遊感があり、もしかすると工
中ではと受け止められかねない未完
感すら漂わせている。

散在する3つの木の箱

図面上で平面構成をみると、妻入り、
通り土間、それに沿って店舗(事務所)、
寝室、居間、キッチンなどの異なる機
能の室が直列に並んでいる。入り口か
ら裏庭まで貫通している通り土間はと
きに通路、ときに中庭と自在に幅を変
えている。長さ19mのほぼ中央に井戸
がある。既存の家屋の解体時に思いが
けず床下から現れたものだが、あとか
も設計時点で組み込まれていたかのよ
うな絶妙な位置にある。想定外のこの
事実が、敷地の形状を素直にとらえ、
必要な機能を効率よく配すると、自然
にこうした構成に行き着くことを示し
ている。

図面上ではバナキュラーな町家の構



内観

洗面室・浴室上部のロフトから前面道路の西側を見る。箱を覆う家型の鉄骨フレームがそのまま室内の天井になっている。

成が忠実に踏襲されているようにみえるが、実際の様相は違う。鉄骨の家型シェルターの内側に、それとは完全に縁を切って、木造軸組の箱が3つ置かれている。箱は必要に応じて大きさを違え、凸凹があつて整形ではない。きれいに揃つて並んでいるのではなく、面がずれ、高低が変わり、散在している状態に近い。シェルターが正確な規則性を備えているのに反して、箱は不規則で自由なリズムを刻んでいる。パナキュラーな町家が内外一体となつて特定の規則的なリズムを奏でている姿とは正反対といえる。

箱の散在という構成は施主夫妻の意向を汲んでのことでもある。子どもができたときに購入した家に住みはじめから33年目に新しい場所に移ることを決めた施主は、有山さんの両親で、もし敷地にゆとりがあれば、季節、天候、気分に応じてあちこちと移動するというテント生活の延長のような住み方を望んでいた。カヌーの競技や普及活動に打ち込んできたアウトドア派の父からすると、日常の住まいも土地に縛りつけられるのではなく、より融通のきく住み方に憧れがあつたのではないかと。さすがに現実がそれを許さなかつたが、不透明な壁を極力なくし、ガラスと半透明のポリカーボネイトを多用した開放的な箱は、常設というよりはよほど仮設的な感覚をもっている。

青森―仙台―奈良

設計者の有山さんと松原慈さんは、大学院のときにGPSを利用したツー

ル開発の研究助成金を得たことをきっかけに、もうひとりの仲間と3人で事務所を立ち上げた。そのうち、店舗デザインや展覧会の会場デザインを行うようになったが、並行して美術のジャンルで、いわばアーティストとして制作やワークショップへの参加を要請される機会が巡ってきた。建築のジャンルに根を置きながら、インテリア、グラフィック、ウェブなどのデザインに重心を置きつつ、アートへと活動範囲が広がり、ジャンルの境界線をことさらに意識しない、しなやかな活動を継続してきた。

2012年には、青森国際芸術センター1でのグルーブ展と仙台スクール・オブ・デザインでの滞在制作の招待がほぼ同時にあつた。両方ともに空間的なインスタレーションが求められていたことから、実施設計の段階に進んでいた「33年目の家」と関連付けることがもくろまれた。展示スペースの規模と予算に応じて、青森では「33年目の家」のふたつの平屋の箱を、また仙台では箱の上のせる小さな小屋を、いずれも原寸大で制作し、そのまま奈良に移設するという計画がスタートした。

移設を前提とした構築物が、そのまま恒久的な家に転化する。美術のジャンルに含まれる活動が、そのまま建築

Special Feature
The House-shaped
House

Case Study

04

のジャンルにシームレスに移行する。あるようでいて実際にはめつたに生じない事態であり、行為である。有山さん、松原さんが継続してきたいく筋も活動が一カ所に流れ込み、集約され、結実したといえるのだろうか。

そうした視線からもう一度この住宅のシェルターと箱の組み合わせを観察すると、木と鉄という異なる材質の線材が同一の寸法、精度をもって縦横に飛び交い、合板、白漆喰、中空ポリカーボネイト、エキスパンドメタル、ガラスというた面材がそれぞれテクス



Ariyama Hiroi

チャーと透明度を違えて重層し、全体としては境界面が明瞭に存在する建築空間というよりは、光、風、音によつて刻々と変化して止むことがない様相を時間的経過とともに生み出していく装置であることが理解される。

ゴーストハウスへのオマージュ

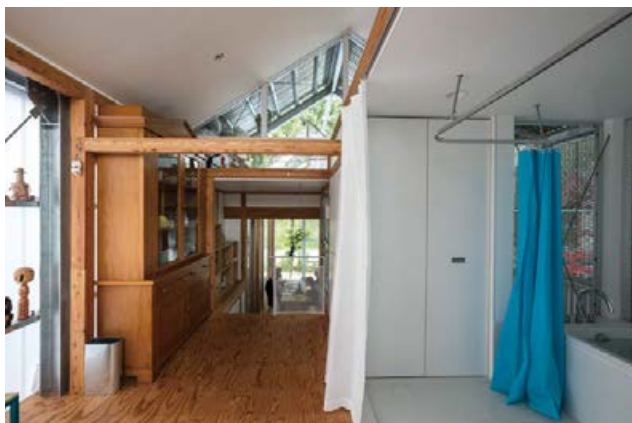
ニューヨークから電車で1時間ほど、ニューカナンの閑静な地に故フィリップ・ジョンソンの自邸があり、現代建築に関心がある人たちの巡礼地となっている。残念ながらもまだ訪問したことはない。広い敷地には1949年に完成したグラスハウスをはじめ、半世紀

居間・キッチン

→居間・キッチン側から奥の脱衣所側を見る。手前は床から天井までの大きな両開き戸。

家事室・浴室

←家事室側から奥の居間・キッチン側を見る。木造の箱は、集成材の軸と、構造用合板の面で構成されている。



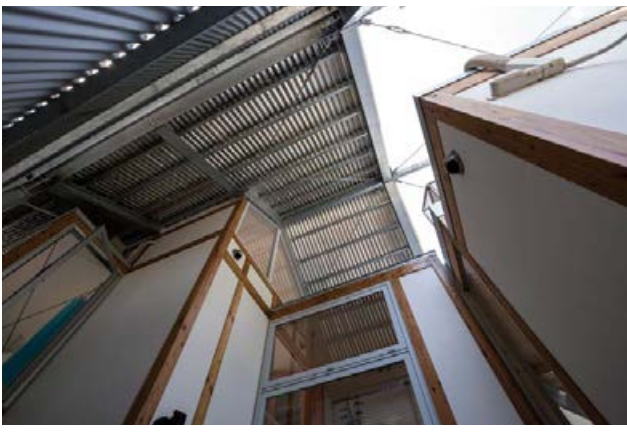


通り土間

道路から玄関までは通り土間になっている。既存の家屋を解体した際に、通り土間の位置に井戸が見つかり、急遽、再利用することになったという。平面が従来の町家を踏襲しているためか、結果的に井戸が絶妙な位置に配されることになった。

近くにわたって順に建てられてきた10棟あまりの建物が散在している。グラスハウスは別として、各棟にはそれぞれ書斎、彫刻ギャラリー、ゲストハウスなど、単一の機能が割り振られている。なかでも最も小さい構築物が「ゴーストハウス」。ユリの球根を育てるための鉄のフレームと金網からなる単純な家型のケージである。フレームは二分割され、人間は入れるが球根を荒らすヘラジカは入れない程度の隙間をあけて置かれている。

天井見上げ



玄関から木造の箱、鉄骨のフレームを見上げる。屋根がかけられた部分と、かけられていない部分があることがわかる。

有山さんは「ゴーストハウス」に魅かれた。家型という明確な象徴性を与えておきながらあえて二分割して象徴性を損じていること、一見すると機能が不明瞭で意味のない不要な構築物としか見えないこと、中途半端で不可思議なスケール感であることに関心があつたのではないか。あるいは、人工の形には必ず機能が伴い、意味が張り付いているはずだという先入観に対する裏切りをそこに見たのではないか。そのオマージュとして仙台で制作されたケージは、奈良に運ばれ、木造の箱の上のせられた。

Special Feature
The House-shaped House

確かにとした意味が張り巡らされた状況のなかに、意味不明な小さな立体がまぎれ込む。すると一種の異化作用が起き、既成の意味の相対化がうながされ、波紋は全体に広がる。全体の安定した構成がほころび、日常の感覚に揺らぎが生じる。「ゴーストハウス」へのオマージュとして捧げられたこのケージは、意外にも「33年目の家」の核心をなす、小さいが重要な造形なのかもしれない。

モロッコのなるもの

実施を前提とした建築の設計案が公募され、選考された案が代官山のギャラリーで展示されるといって1年に1度の展覧会がある。若手建築家の登竜門

Case Study

04

とされるSDレビュー。

2010年「33年目の家」が入選した。20分の1の縮尺の大きな模型に、家具などの備品や植栽など、形あるものをすべて精緻に組み込んだ展示が行われた。それは造形の美しさと整合性を開陳するのではなく、そのなかで展開される生活のありさまを余すところなく表現しようとしたものだった。それを見たドイツのさる賢人が、「モロッコの」な住居であると評した。モロッコのとは、外殻は単純で、固く、閉じているが、内側は中庭を囲んで複雑な構成を呈し、強烈な陽光が降り注ぐデッキがあり、生活の多様な姿があふれるように表出している状態を指すと推定される。



Ariyama Hiroi

設計者が思ってもみない指摘だった。そうだが、言われてみればなるほど、「33年目の家」の整ったシエルトの内側に自由気ままな生活のスタイルをやらわらかに受け入れる空間がしつらえられている姿は、モロッコのと称しても遠くないのだろう。

設計者のひとりである松原さんは、賢人の言葉に触発され、その後モロッコに渡り、アーティストとしての活動に専念し、今に至っているという。

奈良、東大寺境内とモロッコがつながるといふ不思議。

こうしてみてきたように「33年目の家」には、中世から現代までのいくつ

店舗



前面道路側に配された店舗。正面に大きく開かれています。店舗上部はバルコニーになっている。

もの時間が導き入れられ、ニューカナン、オーストラリア、モロッコほか、各地とつながり、アートと建築が交錯し、仮設と常設の境目が溶けあい、洗練と粗野が同居し、バナキュラーとモダンが絡みあい、という具合に、多種多様な要素とエネルギーが渦を巻いて流れ込んでいる。小さな立体の内にも、今にも大海に船出してしまいうような勢いが生み出されている。

「33年目の家」

建築概要

所在地	奈良県奈良市
主要用途	店舗付き住宅
家族構成	夫婦
設計	有山宙+ 松原慈 / assistant
構造設計	満田衛資構造計画研究所
構造	鉄骨造+木造
施工	北条工務店
階数	地上2階
敷地面積	189.02㎡
建築面積	75.59㎡
延床面積	104.43㎡
設計期間	2010年5月～2011年12月
工事期間	2012年1月～2013年6月

おもな外部仕上げ

屋根	チタン亜鉛合金
外壁	レンガタイル 中空ポリカーボネイト 波板ポリカーボネイト ガルバリウム鋼板
開口部	木製サッシ スチールサッシ アルミサッシ

おもな内部仕上げ

キッチン	
床	ナラフローリング
壁・天井	PB t=9.5mm
浴室	
床・壁	モザイクタイル
天井	珪酸カルシウム板
居間	
床	ナラフローリング
壁	ガラス
天井	PB t=9.5mm
家事室	
床	針葉樹合板
壁	中空ポリカーボネイト
天井	PB t=9.5mm
店舗	
床	針葉樹合板
壁	ガラス PB t=9.5mm
天井	PB t=9.5mm



ありやま・ひろい / 1978年奈良県生まれ。2001年東京大学工学部建築学科卒業。02年assistantを共同設立。03年東京大学大学院工学系研究科建築学修了。04～05年ポーラ美術振興財団の助成によりイギリスで研修。

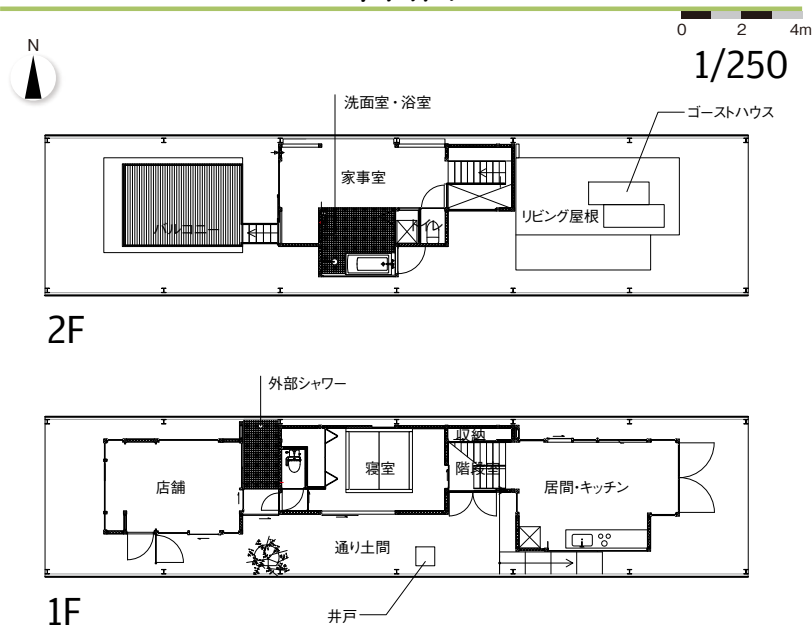


まつばら・めぐみ / 1977年静岡県生まれ。2001年東京大学工学部建築学科卒業。02年assistantを共同設立。03年東京大学大学院学際情報学府修了。04年ロンドン大学パレット建築学校MA修了。12年よりモロッコと日本を拠点に活動。

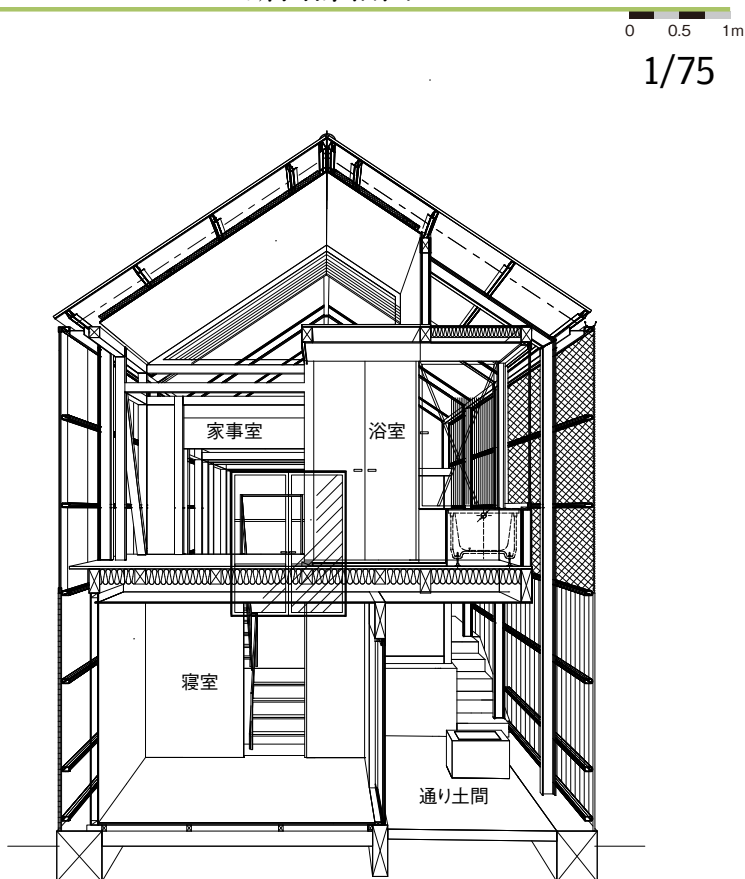


外観と周囲。奥の森が東大寺境内。

平面図



断面詳細図



1階のワンルーム空間。
Y字の柱が林立し、その
斜材部分が交差しながら
全体を構成している。床
梁も柱や斜材にのるので
はなく、横から取り付く
など、特殊な構造になっ
ている。

Shinozaki Hiroyuki

Y字の柱と家型という
明快な形態をした架構体。
その架構体が
生み出す空間を見る。

Shinozaki Hiroyuki

作品 「House H」

設計

篠崎弘之

文／豊田正弘 写真／傍島利浩

05



「House H」の魅力は、伝統的な空間構成を深く読み解き、まったく新しい今日的なデザインを創造しているところにある。伝統と現代との距離を慎重に計り、無理なく同居させているように感じる。

「トラディショナルなものに敬意を払うと同時に、新しい時代のデザインとして別のものをつくることは健全なやり方ではないか」と設計者の篠崎弘之さんは語る。そうすることで、ここでは床・壁・天井という建築の基本概念を大きく揺さぶっている。具体的には、「土間」掘立て柱「家型」の存在だ。それらを順に見ていこう。

まず土間がある

広い土間テラスはそのまま外部に連続し、道路側では玄関ポーチを兼ねて1・5 mほど張り出す。前面道路の幅員が6 mと広く、景色の抜けがあるため、効果的に外部を引き込んでいる。そしてコンクリートは犬走り状に建物の四周をまわり、敷地奥と同じレベル、GL±0で広がる。

ダイニングやリビングは400 mm、キッチンも260 mmだけそこから上げる。「必要な場所を生活土間として持ち上げた」と篠崎さん。それは、三和土の土間から部屋に上がり込むような伝統的な民家の形式とほぼいぶん異なる。地面から切り離され、しかし低い重心で安定感のある基壇が誕生した。

浮遊する床

こうした1階の床と対照的に、2階・ロフトの床は軽やかに吹抜けに浮かぶ。分割してさまざまなレベルに置かれ、上下面、つまり床面と天井面、そして木口までがシナ合板・染色塗装で同一の仕上げが施される。床というより抽象的なオブジェのようだ。

かつて篠崎さんが伊東豊雄建築設計事務所に入所したのは、「せんだいメデアアテーク」(2000)の竣工直後にあたる。軽やかなチューブで支えられ、鉄板でサンドイッチ

された床の存在感に強烈な刺激を受けたそう。また同時に伊東氏の建築は「ゲント市文化フォーラム」(04)、「台中メトロポリタン・オペラハウス」(建設中)など、自在に傾斜した床へと向かい始める。事務所に在籍した7年間、床についてつねに意識していたと篠崎さんは言う。その最終的な結論は、床の水平性はやはり重要であるというものだった。

そして水平な床によるもつと自由な展開を考えるうちに、架構を建物全体に張り巡らせ、好きなのところに居どころをつくるという発想が生まれていく。「メデアアテーク」の床とチューブとの関係を逆転させたようなビジョンだ。つまり前作「House T」(12)に

Special Feature
The House-shaped
House

Case Study

05

も見られるように、柱梁による架構体から分離して床をつくること。鉄筋コンクリート造では梁と床スラブは一体となつて強度を得るが、在来木造では必ずしも梁が直接に床を支える必要はない。

架構体への意識

「架構体がすべて」と篠崎さん。菊竹清訓氏はデザインを3つの段階に分け、「か・かた・かたち」の方法論を提示した。篠崎さんは、その「かた」をどう



Shinozaki Hiroyuki

つくるかが重要なテーマだという。まず機能を捨てて架構体をつくる。それが建築の永続性を見せられるまで昇華され、抽象化されれば「かたち」になる。そこで初めて自由な機能を背負わせる。この住宅でいえば、テーブルを置けばダイニングになり、ラグを敷けばリビングになるといった、家が本来もつ自由な居場所を提供するための架構体がイメージされている。

それを担うのがY字形の掘立て柱である。その存在が「House H」の印象を決定付ける。フロアリングの床からいきなり立ち上がる掘立て柱は、原始の小屋を思わせるような素朴さをたたえている。しかしそれは途中で分岐して二股に開き、水平・垂直を原則とする伝統的な木造架構とはまったく

2階廊下

→2階の廊下部分を見通す。Y字柱の斜材部分が2階に伸びてきている。2階のさらに上に、いくつかロフト(上部収納)の床が浮遊している。

土間テラスとダイニング

←1階の土間テラスから、ダイニング側を見る。土間テラスには玄関を介さずに、直接外部土間から入ることができる。



1階全景

1階の玄関から、ダイニング側を見る。Y字柱の一部は斜材間を閉じた耐力壁になっている。奥に勝手口がある。



違ったものになる。

Y字柱に 秘められたもの

実際に玄関から内部に入ると、視線はその架構に微妙にさえぎられながら水平方向・垂直方向に抜けていく。光のグラデーション、音の響きなどから、そこが外観そのままの大きな気積をもつワンルームであることはすぐに認識できる。

篠崎さんは、「全体がやわらかく分節されながら広がっていくような空間」と説明する。

Y字柱は分岐した上部で隣のものと同重なり、それが4組、計8本置かれてある。4組のうち2組は上部に構造用合板を張って構面をつくり、耐力壁として効かせる。その菱形状の壁と外周壁で水平力を負担しており、柱間に設ける一般的な耐力壁はない。また、柱脚部は鉄筋コンクリートの基礎柱型内に埋め込んで水平剛性を高めているが、それは前出の400mmの床高に納めら

れ、掘立て柱としての表現が貫かれている。

Y字を構成するのは90mm角の集成材。在来木造でよく目にする105mm角のものよりひとまわり細い。材同士は、接合金物を挿入し接着剤を充填した後、木にふたをしているので、金物は表から見えない。耐力壁ではちりをとって壁厚を抑えるなど、繊細な表現がなされている。

そしてY字に分岐する高さは3種類に設定された。それにより低い場合は囲われた感じ、高い場合は抜けた感じが強くなり、分節の加減をコントロールしている。その高さは、Y字同士の交点、さらに2階・ロフトの床高とリンクし、構造的には低いほど安定する。それら多くのパラメーターを調整して架構は決定されているが、実際の空間はシステムチックな感じを与え

Special Feature
The House-shaped House

Case Study

05



Shinozaki Hiroyuki

抽象度の 高い家型

構成の順序として

「まず土間があり、掘立て柱によって場所をつくり、囲いをした」と篠崎さんは言う。

屋根と南北の壁面が連続して囲いとなり、それが東西に延びて表面から少し突き出す。東面はY字柱の内包を暗示するように斜めのラインが多く見られる。それは囲いの切断面であること示している。その屋根形状は、上部で90度に開いたY字柱がそれぞれ勾配天井と直交することでつくられる。すなわち矩勾配の切妻屋根である。



土間テラス

ず、むしろ恣意的につくられたような印象さえ受ける。

2階・ロフトの床はY字柱にドリフトピンで縫いつけられており、地震力は受けない。つまり軽やかな見た目のとおり、この床がなくても住宅の構造は成立しているのだ。

写真上/ダイニング側から土間テラスを見る。仕事をしたり、人が集えるスペースになっている。

囲いとしてのエッジを見せた象徴的な家型が生まれた。

コミュニケーション・ ツールとしての 可能性

建主から設計者にどのような要望を伝えたのかをうかがうと、その答えにちよつと驚いた。30代前半の年若いご主人が「人がたくさん集まり、パーベキューもできる縁側的な造りを」と言うのだ。建て替え前の家はいわゆる日本家屋ではなく、軽量鉄骨造のフラットルーフで、和室に小さな濡れ縁がついていたそうだ。縁側は昔からの憧れだという。

篠崎さんも「この家を訪れた一般の人が好印象をもつのは、土間や家型が受け入れやすい雰囲気をつくっているからでは」と分析する。確かにY字柱のような新しいデザインを説明するのは難しい。一方、土間や家型などの伝統的な空間のありようは、ダイレクトに人に伝わっていく。バナキュラーな建築言語は、設計者と建主をつなぐコミュニケーション・ツールとして確実に生き続けている。



上部収納

写真上/2階の上部収納。各床は斜材に横から取り付いているため、まるで浮遊しているかのように見える。



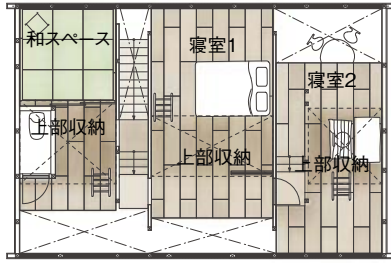
外観

前面道路側の東側正面。矩勾配の家型になっている。内部の斜材に合わせているため、開口部の上部や、矩形の窓も斜めになっている。犬走り状にコンクリートの土間が四周をまわっている。

平面図



0 1 2m
1/200



2F



1F

Special Feature
The House-shaped
House

Case Study

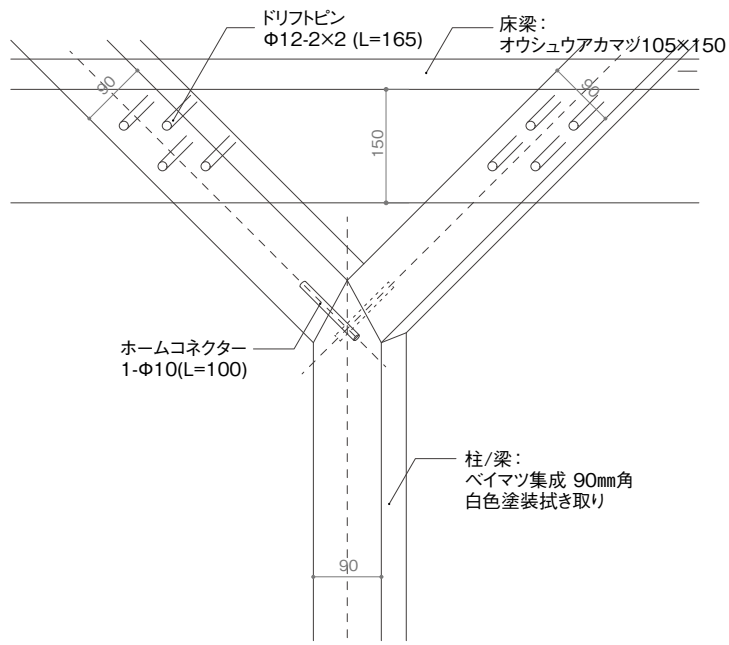
05



Shinozaki Hiroyuki

柱/梁 三叉部取合詳細図

0 50 100mm
1/10



寝室2と上部収納。

House H

建築概要

所在地	千葉県松戸市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	篠崎弘之建築設計事務所
構造設計	寺戸巽海構造計画工房
構造	木造在来工法
施工	広橋工務店
階数	地上2階
敷地面積	161.82㎡
建築面積	64.02㎡
延床面積	115.41㎡
設計期間	2011年7月～2012年5月
工事期間	2012年6月～11月

おもな外部仕上げ

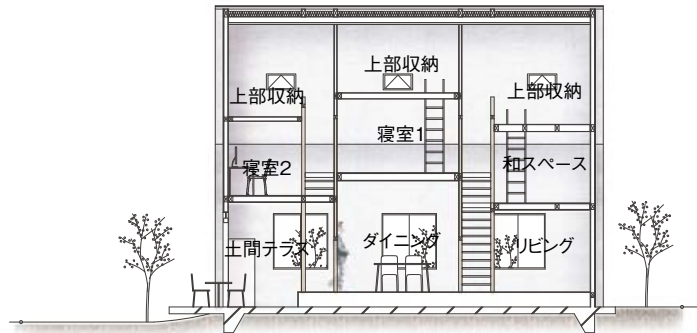
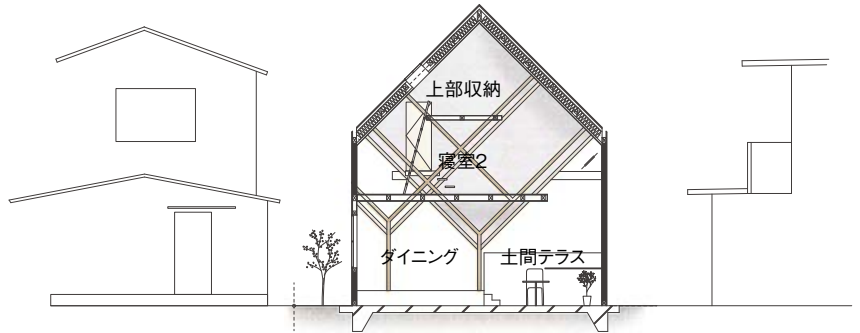
屋根・外壁	モルタル左官 t=15mm リシン吹付け
開口部	アルミサッシ
外構	砂利敷き

おもな内部仕上げ

キッチン	
床	303mm角Pタイル張り
壁	PB t=12.5mm クロス張り
天井	シナ合板 t=4.0mm オスモカラー 拭き取り
浴室	
床	防水モルタル FRP防水
壁	耐水合板 t=12mm FRP防水
天井	珪酸カルシウム板 t=6mm VP
トイレ	
床	ナラ無垢フローリング
壁	PB t=12.5mm クロス張り 一部EP
天井	PB t=9.5mm クロス張り
洗面所	
床	ナラ無垢フローリング
壁	PB t=12.5mm クロス張り 一部鏡張り
天井	シナ合板 t=4.0mm オスモカラー 拭き取り
リビング・ダイニング	
床	ナラ無垢フローリング
壁	PB t=12.5mm 珪藻土クロス張り
天井	シナ合板 t=4.0mm オスモカラー 拭き取り
土間テラス	
床	土間コンクリート 防塵剤塗付
壁	PB t=12.5mm クロス張り
天井	シナ合板 t=4.0mm オスモカラー 拭き取り
和スペース	
床	畳敷き
壁	PB t=12.5mm 珪藻土クロス張り
天井	PB t=9.5mm クロス張り
寝室	
床	シナ合板 t=9.0mm オスモカラー 拭き取り
壁	PB t=12.5mm 珪藻土クロス張り
天井	PB t=9.5mm クロス張り

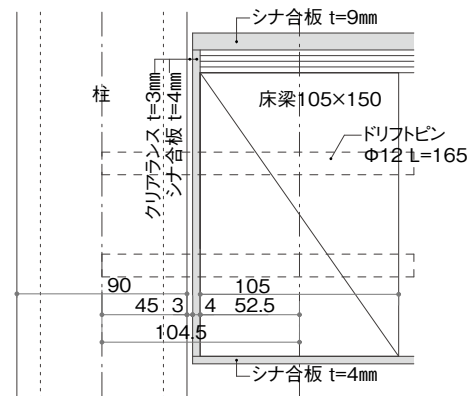
断面図

0 1 2m
1/200



柱/床梁 木口面納まり詳細図

0 25 50mm
1/4



しのぎき・ひろゆき／
1978年栃木県生まれ。
2000年京都工芸繊維大
学造形工学科卒業。02
年東京藝術大学大学院
美術研究科修了。同年
伊東豊雄建築設計事務
所。09年篠崎弘之建築
設計事務所設立。現在、
東京電機大学非常勤講
師。

トイレ・バス・シャワーは共用

4月上旬というのに、その日は暑いほどだった。リヨンから在来線でラルブル駅に着いたのだがタクシーがない。途方に暮れていると、この地域に住んでいるらしいご婦人が親切にも自分の車にのせて連れて行ってくださった。徒歩で20分と駅で言われたが、重いキャリーカートを引いていたから40分はかかっただろう。

美しい新緑の小高い丘の上にその建物が見えてきた。あれだ、ついに来た。ドミニコ会から依頼された修道院。極限のヒューマンスケールをどう料理したかを見たかったのだ。ル・コルビュジェ(*1) 73歳の頃の作。

泊まることができるというのが現役の修道院ということで覚悟をしてきた。だが、それはうれしくも裏切られることになる。

これまで穴があくほど『GA』の二川さん(*2)の写真を見てきたが、それがここにある。大きなマッス。僧坊。鐘楼。礼拝堂は15m460と高い天井。静謐なコンクリートの肌。ピーンと張りつめた空気。低い天井についたあの3つの鮮やかな色の丸いスカイライト。計画では高いほうの壁面はダイヤモンド・カットのようなデザインであったが実現しなかった。

禁欲的とよくいわれるが、隆起した石みたいな沈黙のロンシャンの教会より、ずっと饒舌に見える。

約100室の同じ形の僧坊は一部を宿泊できるようにしてある。内法5938×1834mmの細長い平面。幅は京間の畳長さよりちよつと小さい。奥行1495mmのブリーズ・ソレイユ(*3)がついて、芽吹きの本々が見えるせい意外に明るい。仏教寺院の僧坊のようなものを想像して来たのだが暗さがまったくない。何度も塗り直したような窓とドアまわりの赤、黄、緑、黒のペイントは、今やなつかしいあの色。蚊除けの金網がついて、風を通す幅265mmの小さなドアがかわいい。

トイレとバス・シャワールームは当然共用。男女ともそれ



丘の上の修道院

それ僧坊2モデュールを使っいて清潔で必要最小限。too muchの世界からやってきた私にとって、このぎりぎりの装備は潔くてさっぱりさえる。

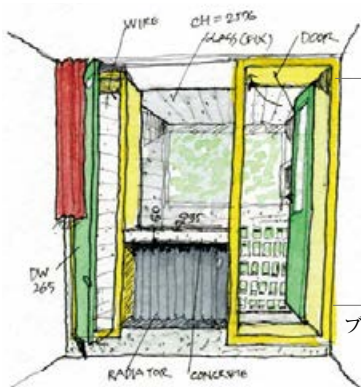
ダイナー。赤ワインがテーブルに出ているではないか！米をゆでたようなサラダ。丸ごとのゆで卵にソテーしたほうれん草を絡めた料理。デザートにはオレンジとチーズ。質素だが決してまずくはない。ホテル代は朝夕の食事がついて51€という安さなのに。

食堂の高いガラス面は幅42mmと細いコンクリートのマリオン(*4)。そのピッチは230から1450mmほどまでたくさんあって、オーケストラの音楽になっているのだとサービスの女性が解説してくれる(設計協力をしたヤニス・クセナキス[*5]によるものか)。

宿泊客はほとんどが建築関係者ではないかと思われ、その日も台湾の女性建築家、ニューヨークの若い建築家夫婦と意気投合。楽しい夕食となった。

すでにして古典だが、この明るい透明感。ちつとも古くなっていない……と思いがら共用のシャワールームを使い、少し小さいベッドをメーカーキングしてすがすがしい気分ですり落ちる。

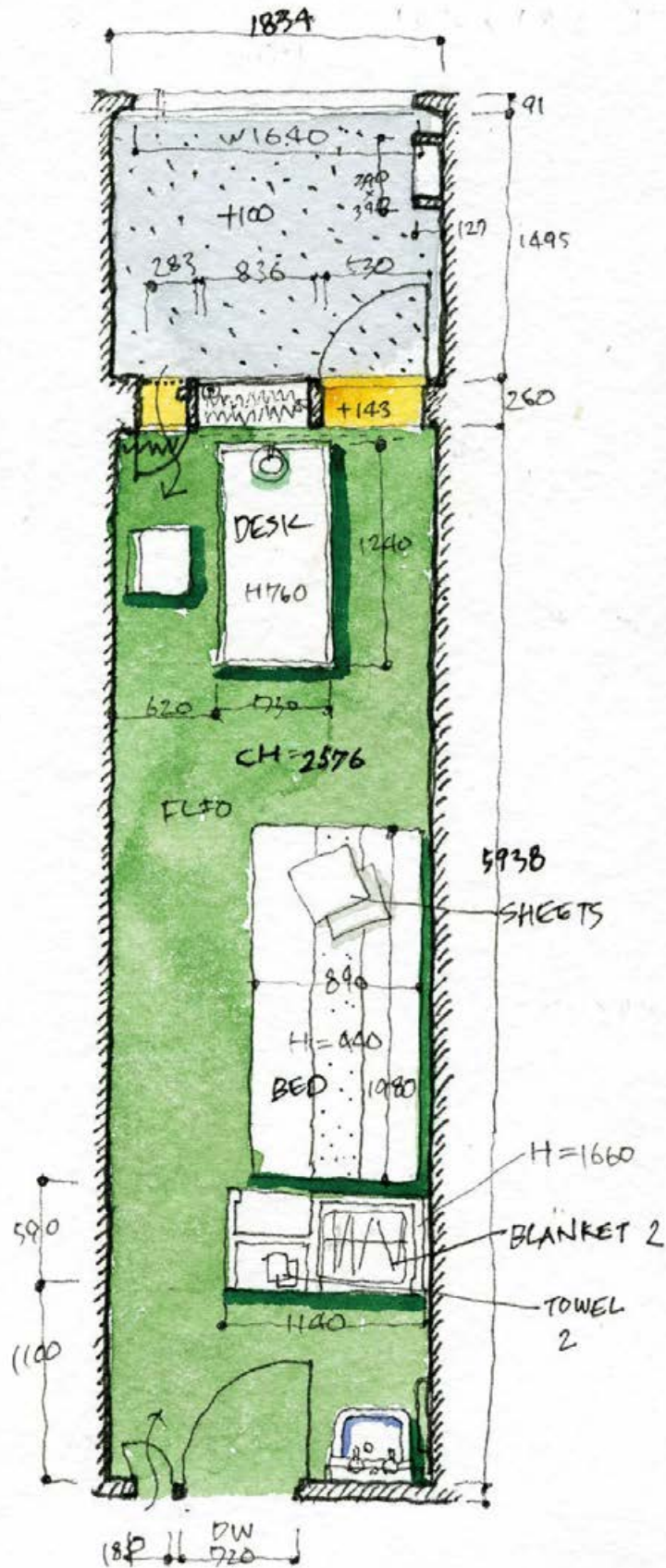
- *1/Le Corbusier (1887~1965)・・・スイスで生まれフランスでも活躍した建築家の巨匠。パリ・ヴォワザン計画(1925)、「サヴォワ邸」(31)、マルセイユの「ユニテ・ダビタシオン」(52)、「ロンシャンの教会」(55)、「ラ・トゥーレット修道院」(60)、チャンディーガルのプロジェクトなど作品は多数。
- *2/二川幸夫(1932~2013)・・・建築写真家。建築写真専門誌『GA』を発行した。受賞多数。
- *3/ブリーズ・ソレイユ・・・フランス語で「太陽を砕く」という意味で、庇状のルーバーをル・コルビュジェが好んで使った。
- *4/mulion: 開口部材を支える垂直の間柱。
- *5/Janis Xenakis (1922~2001)・・・ルーマニア生まれのギリシャ系フランス人の現代音楽作曲家、建築家。アテネ工科大学で建築と数学を学び、レジスタンス運動に参加。ル・コルビュジェの弟子となり、モデューロ理論の発案、ラ・トゥーレット修道院などに携わる。



ブリーズ・ソレイユが見える。

うら・かずや/建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99~2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。北海道日建設計デザインアドバイザー。著書に『旅はゲートルーム』(東京書籍・光文社)、『測って描く旅』(彰国社)、『旅はゲートルームII』(光文社)がある。

LA TOURETTE



Text Sketch by Ura Kazuya

僧坊の幅は畳長さに近い。

Couvent de la Tourette

Add/BP105 Eveux, 69591 L'Arbresle cedex, France
 Charges/37€(朝食付き)、夕食14€
 Tel/+33 (0) 4 72 19 10 90
 URL/http://www.couventdelatourette.fr
 1€=138.82円(2014年6月24日現在のレート)

木造

1 / 外観は当初のごとくであったが、今は、仕上げが変えられている。ル・コルビュジェの主張に従い、横長の連続窓を採用している。(写真提供 / 大串玲子)

2 / 応接間の中は竣工当時と変わらず、横長連続窓のよさが保たれている。障子の柵が正方形なのは、モダンな感覚の反映。

モダニズム

の系譜



1

2

「O邸」(増築) 設計 / 大江 宏



文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Akiyama Ryoji

写真／秋山亮二

連載

現代 住宅 併走

第二十六回



3

↑ 玄関

4

5

↓ 応接間



3 / 玄関。左手が入り口。右手に水平性を強調した棚。4 / 床下に設けられた暖房の熱源は、練炭のコンロだったと推定される。(写真提供 / 伏見唯) 5 / 応接間から書斎を見る。右手の大谷石が暖炉をしのばせる。すぐ左手の床下から暖気が上ってくる。





6 / 書齋。施主の大串氏は日本美術のすぐれた研究者で、阿弥陀来迎図の研究で知られるが、若くして亡くなった。

現代住宅
併走

Ohe Hiroshi × Fujimori Terunobu

↑ 書齋

6

↓ 応接間の障子

7

7 / 正方形の桝からなる正方形の障子に注目。そして丸柱。細身で凛とした美学は大江宏の生涯を貫く。



大

江宏のデビュー作、それも未発表の住宅がある。と編集者から聞いたとき、ふたつ返事で取り上げることにしたものの、不安があった。

大江宏は、丹下健三、浜口隆一と東京大学建築学科の同期で、卒業年に因んで「昭和十三年組」と呼ばれ、日本の近代建築史に大きな足跡を残している。

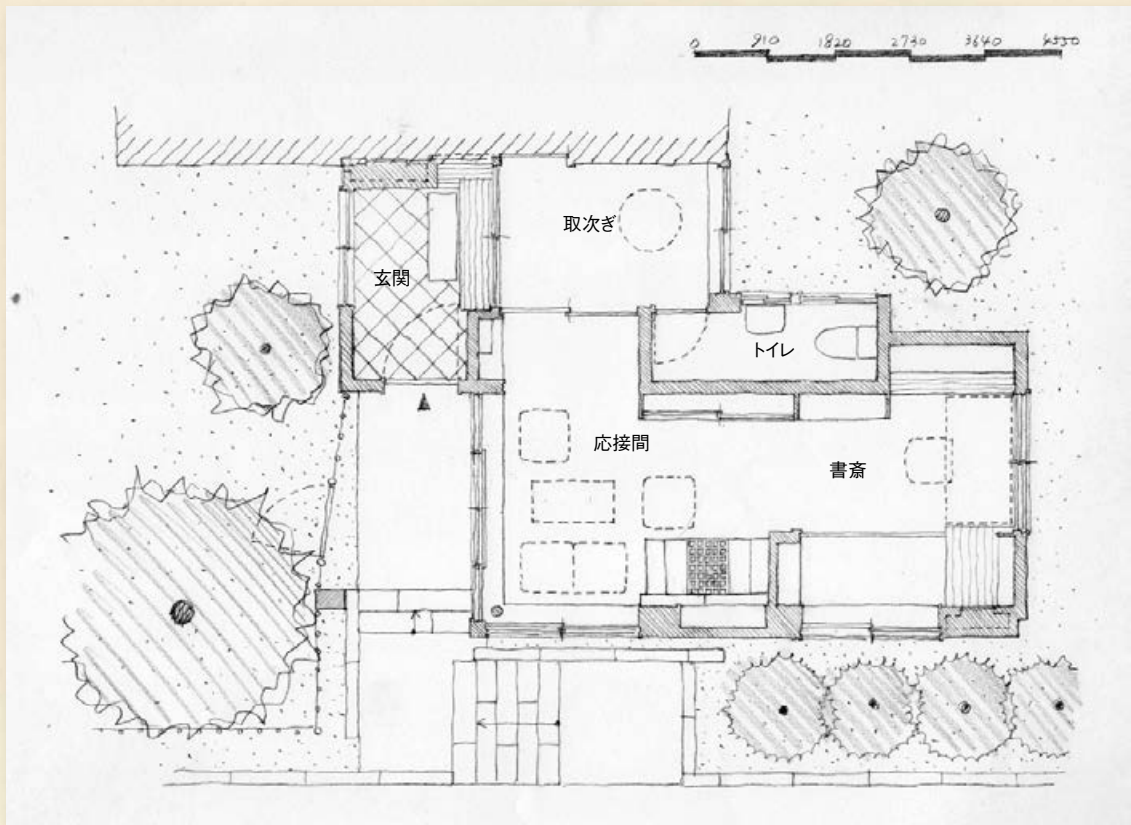
卒業後すぐ文部省に入り、さらに三菱地所に転じ、1953年以後は法政大学のプロフェッサーアーキテクトとして教育と設計に尽力しているが、私を知る実作は54年の名作「東洋英和女学院小学部」以後のものばかりで、卒業後16年間、文部省での39年の「国史館案」を除くと、どんな仕事をしていたのか思い浮かばない。

そんな歴史家の頭の中に、卒業直後に手がけた住宅が飛び込んできたなら、不安になって当然だろう。

不安はふたつ。実務経験の乏しい段階の仕事で、果たして紹介に値するかどうか。丹下の向こうを張って独自の戦後デザインを展開した大江宏らしいかどうか。

ふたつの不安を胸にO邸を訪れた。外観をざっと見ただけでは、外装材が改造されており不安はむしろ高まるが、戸口に立ち昔のままのドアまわりを見てひと息つく。左手上のドア灯まわりは明らかにモダニストの手になり、堀口捨己の「小出邸」(25)を思い出す。

「O邸」平面図



今回のために大江新氏が実測して、描き起こした平面図。

現代住宅 併走

Ohe Hiroshi × Fujimori Terunobu

中に入り、まず玄関。右手壁には飾り棚状の板がはまり、上部には数寄屋をしのばせる明かり取り。狭いなかにあれこれの工夫と造形を詰め込み、空間としては混乱しているが、これぞデビュー作の証。やりたいことが多すぎて収拾がつかない。

踏み込みを通つていよいよ主室。主室といっても居間、食堂ではなく、書斎と応接間を指すのは、このひと続きの部屋こそ大江の担当した増築部分となるからだ。

大江のデビュー作は、何人かのデビュー作がそうであるように、施主と建築家の若き日の経歴のからみのなかから生まれた。

大串純夫は、大正最初の年(1912)、東京に生まれ、大正期を通して中・高を成蹊学園で送り、36年、東大の美術史を出て、美術研究所(現・東京文化財研究所)に入り、気鋭の日本美術史研究者として歩み始める。そして、39年に結婚。滝の川の家を現地に移して妻の成との新婚生活を送ることになり、学者にふさわしい書斎と応接間と玄関の増築を大江に頼んだ。

大江は13(大正2)年に生まれ、中・高を成蹊で送り、38年に大学を終え、文部省に入っている。中・高・大、そして文部省まで共に過ごした青年建築家が、卒業の翌年、若き美術史家のためにした増築ということになる。

ドアではなく、引戸を開け、応接間に入って、不安は消えた。



8/郊外の住宅地に立つ。

建築概要

所在地	東京都練馬区
主要用途	専用住宅
設計	大江 宏
施工	不詳
敷地面積	349.80㎡
建築面積(増築部)	32.8㎡
延床面積	115.10㎡
階数	地上1階
構造	木造
竣工(増築部)	1938年頃
図面制作	大江 新

藤森照信

Fujimori Terunobu

建築史家。建築家。東京大学名誉教授。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞=『明治の東京計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラ・ハウス)」(1997)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞など。

9/右が大江宏の子息大江新氏。左が筆者。

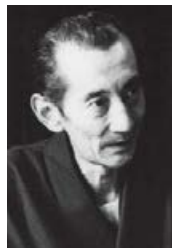


8

椅子・テーブルの向こうの壁のデザインを見ていた。出窓状にし、開口部の外にはガラス戸と雨戸、内側には障子をはめ、障子を引いてガラス越しに外を眺めると、障子位置の丸柱の向こうにガラス戸だけがあるように見える。柱や壁のラインとガラス窓のラインを分離するというのは、ル・コルビュジエが近代建築5つの原則の3番目に挙げた自由なプランの具体的方策にほかならず、日本においてはレーモンドが33年「軽井沢夏の家」でコルビュジエに先駆けて試み、さらに40年には吉田五十八が「惜櫨荘」で巧みに採用した。コルビュジエというよりレーモンドのやり方に学んだと思われる。覗き込んで丸柱の裏を確かめると、角柱が立ち、ガラス窓と雨戸を受け止めている。室内から眺

めてどこからも角柱は見えないことから、ガラス窓と雨戸の戸当たりのためしかたなく立てたにちがいない。
障 子を立てる(閉める)と、枘を小さくかつ正方形にデザインした障子の中心に丸柱が立ち、このシーンを目にして、これは「木造モダニズム」だと判断し、戦後の純木造の「乃木神社本殿」(62)や木造を意識した「国立能楽堂」(83)を思った。20世紀のモダニズムと木造の伝統のふたつを意識し、細身のプロポーションを好む一方、数寄屋的な崩しとやわらかさは排し、凜とした筋は守る。
 大江の後の資質をうかがわせる造りだけでなく、暖房のためのいかにもの「若描き」も見られ、掘りゴツツかオンドルからの着想で

Oe Hiroshi



1913年に、大江新太郎の子として生まれる。新太郎は伊東忠太に続く社寺建築の名手として知られ、自邸に「国風建築塾」なる設計事務所を置いていた。子の宏は、東京大学に建築を学び、丹下健三、浜口隆一と同級生であった。卒業後、丹下の存在を強く意識しながら独自の道を歩み、「法政大学55号館」(55)ではミースばりのガラス建築をつくり、また後には伝統の木造を踏まえた国立能楽堂や乃木神社などを手がけるが、しかし決して数寄屋には近づかず、モダニズム建築家としての筋を通した。
 写真/杉全泰

大江宏

- あるう、床下に練炭コンロを置き、床に格子を組み、格子越しに上昇した暖気を床内に広がらせる工夫もしている。室内の壁に大谷石を積み、上部を柵状にしつらえていることから美学的には暖炉を意識している。
- 全体を見渡し、木造の伝統と20世紀モダニズムを念頭に置いて特徴を列記しよう。
- ① 柱、長押は見せず、漆喰の大壁
 - ② 障子、引戸を使う
 - ③ 独立丸柱
 - ④ 水平性を強調した段違いの柵
 - ⑤ 外観は屋根を見せる
 - ⑥ 外壁は縦羽目板張り
- 木造で屋根を見せるという造りの大筋は伝統に従うが、外壁は非伝統の⑥、内部においては、②、

④で伝統を、①、③で20世紀モダニズムを取り入れている。そして、伝統から持ち込んだ②、④もモダニズムとの親和性の強いことを思うと、「軽井沢夏の家」から始まる「木造モダニズム」のひとつと判定していいだろう。

これまで日本独自の20世紀建築として「木造モダニズム」という概念を提唱し、藤井厚二、吉田五十八、堀口捨己、レーモンド、土浦亀城、前川國男、丹下健三、吉村順三らの木造を取り上げてきたが、大江宏もこの視点から検討可能なことを確認できてうれしかった。

もうひとつ、細身の円柱に見られるように、すぐれた建築家はデビュー作から変わらぬ資質を発揮するのもしれなかった。

9

「このか」



↑居室2

写真上／トイレ付きの居室。トイレの間仕切り壁は取りはずし可能。下／ベッドサイド水洗トイレの配管を接続する点検口は左手と右奥の壁面2カ所にある。



↑居室10

写真上／ベッドサイド水洗トイレを設置した居室。床下に配管がないため、ポータブルトイレ感覚で自由に移動できる。



↑居室10全景



できるだけ長いあいだ
自力でトイレに
行けるように

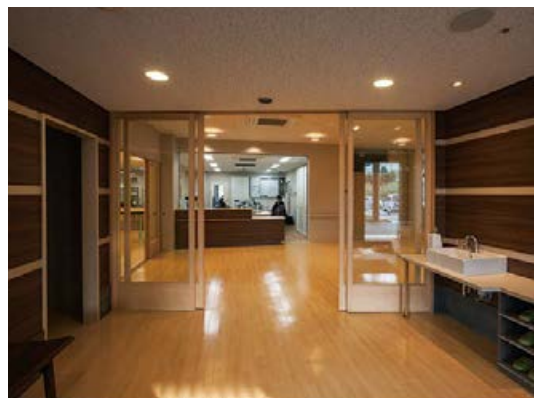
のどかな田園風景のなかに立つ。

北は日本海に面する兵庫県北部の町、豊岡市のなかほどに今年4月、地域密着型特別養護老人ホーム「このか」がオープンした。施設は特別養護老人ホーム（以下、特養）、シヨートステイ、デイサービスを併設しており、特養は小規模な地域密着型（注1）でなおかつユニット型（注2）を採用。居室は全39室が個室で、1階に特養が1ユニット（9室）、シヨートステイ1ユニット（10室）、2階に特養2ユニット（10室×2）の計4ユニット、それぞれにリビング、キッチン、食堂、浴室などの共用スペースが備わっている。設計は高齢者施設や病院を数多く手がけていることで知られる、ゆう建築設計。

核家族の家のように

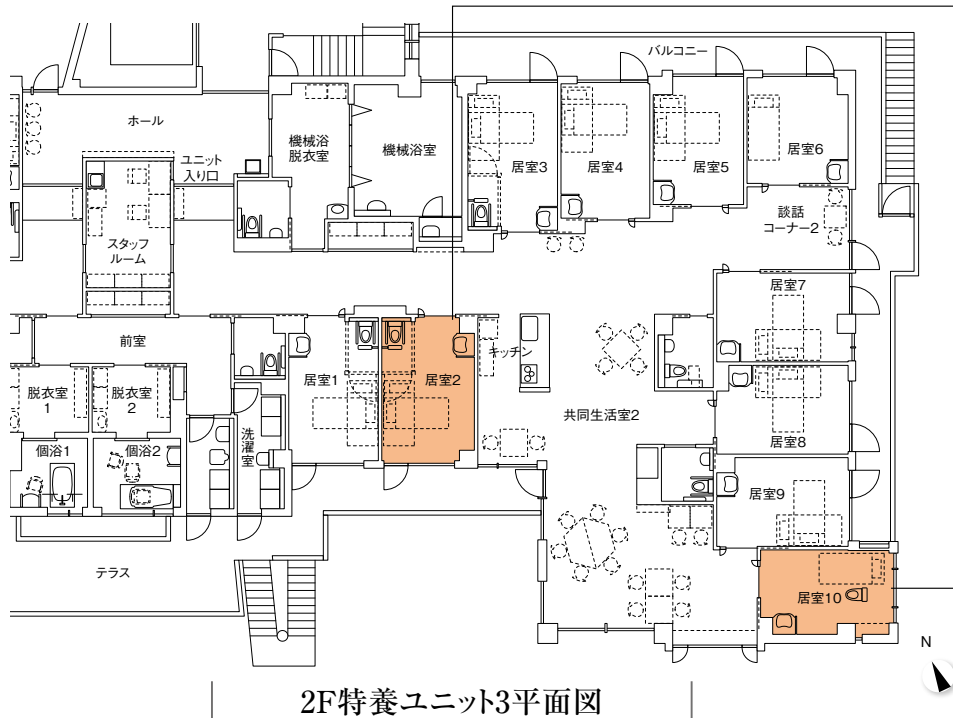
敷地は円山川と山陰本線に挟まれ、周辺には田んぼが点在する住宅地。各ユニットの共用スペースは明るく開放的で、敷地の南に面した開口部

から美しい山並みと田園風景が目に見え込んでくる。ゆう建築設計の伊藤健一さんは「初めて敷地に立ったとき、この景色を眺めながらご飯を食べてほしいなあと思いました。ここはこの地域で暮らしてきた方たちが入る施設なので、今まで見ていたのと同じ山が見えることが安心につながりますから」と振り返る。



↑エントランスホール 事務室方向を見る。左手はデイサービス。

特養ユニット3



2F特養ユニット3平面図



↑共同生活室2



↑ユニット入り口



↑ユニット全景

写真右／キッチンから見る。各居室の入り口を雁行させて手すりをなくし、施設のイメージを払拭。中／ユニット入り口は家の玄関のような趣。左／眺めのよい共用リビング。

全室に「ベッドサイド水洗トイレ」を設置できるように

ところで、この施設はTOTOが昨年9月に発売した「ベッドサイド水洗トイレ」を接続するための配管を特養29室とシヨートステイ10室のすべてに完備している。全室内の壁の各2カ所に、専用の配管ボックスを壁裏に仕込んだ点検口を設置。「ベッドサイド水洗トイレ」は床に固定されておらず、移動できるため、そ

入居者の平均年齢は90歳を超え、車いす使用者が大半のため、ユニット内は手すりもなくしており、より施設くささが払拭されている。

「これまでの施設では、せっかく個室内にトイレがあっても、ベッドからトイレまでの距離が遠いために使えず、結局ベッドのそばにポータブルトイレを置いてある例が珍しくありませんでした。ポータブルトイレの臭いや使用後の片づけは、介護者の負担になるばかりか、介護される

のメリットを生かし、ベッドの位置によってトイレも動かす可能性があるからだ。

特養のなかで個室内にトイレブースがあるのは1ユニットに対して各3室で、ブースの間仕切り壁は取りはずしも可能。残りは自力で外の共用トイレが使えるか、寝たきりでトイレに行けない入居者を想定している。

施設としては、入居者の身体状況によって、トイレのあり方を段階的に変えていきたいと考えている。自力で歩いて行けるうちは外の共用トイレか室内のトイレブースを使ってもらおう。室内ブースを使っている人の歩く距離が限られてきたら、壁を取り払ってベッドをトイレに近づける。それでも無理になったら、「ベッドサイド水洗トイレ」を使ってもらおう。室内にブースがあっても配管を備えた理由がここにある。オープン後すぐ「ベッドサイド水洗トイレ」を使う予定の入居者はまだ数名だが、寝たきりでおむつになるまでの時間を少しでも長くしたいと願う施設にとっては、どの部屋でもこの製品がすぐ使えるというワンクッションが備わっていることに意義があるというわけだ。



1F共用トイレ

壁掛け式小便器を備えた多機能トイレ。



1F汚物処理室

洗濯室を兼ねた汚物処理室。奥にテラスへの出入り口がある。右手前はフチなし形状とトルネード洗浄を採用した、掃除口付きの汚物流し。清潔さが保ちやすい。



2F多機能トイレ

特養の共用トイレ。正面の壁面には、車いすから便座への移乗や排泄の際に使用するレストテーブルを設置。身体を預けることで腹圧がかかり、排便もスムーズに。



2F個室

開口部のある、明るい個室コーナー。浴槽は手すり付きで、両側から介助しやすい配置に。浴室は別に、リフト付き個室や機械浴室も完備している。

一步先の介護を視野に

じつは、この建物の設計期間中にはまだ商品は試作品の段階で、発売

もしないし、便座もあたたかだし、介護士の負担も軽減されるし。ポータブルトイレは不安定で、移乗の際におしりをつけてけがをする方もいますが、これは動かないのもいいですね」

側の自尊心にもかかわる問題ですし、ほかの入居者が生活するリビングの横を通って汚物処理室まで持つて行くという行為自体もなんとなく嫌でしたね」と足立さん。これらをすべて解決した「ベッドサイド水洗トイレ」の果たす役割は大きいと語る。

オープン後、ここで働く主任介護士の山崎真樹子さんは初めてこのトイレを見た感想をこう話す。「画期的だなと思いました。におい

時期は決まっていなかった。が、展示会の参考出品や商品チラシから開発情報を知った足立さんと伊藤さんは、入居者の排泄の自立とトイレのあり方について頭を悩ませていただけに、なんとかこの建物に採用できないか、設計完了までに詳細仕様が決まらないかと相談をもちかけ、ぎりぎりのタイミングで実現したのだそう。伊藤さんたちが試作品を見て、建築にどう組み込むか、さまざまな意見交換を行った結果がカタログの施工図にも反映されている。OTTOの研究開発担当者、松下幸之助さんは「われわれ研究開発者は製品自体のことはわかって、建築や給排水管などの設備との取り合いについては想像もつかない部分が多いので、かなりヒントをいただきました」と語る。

足立さんは目下、このトイレをうまく活用した一步先の介護も考えているとのこと。

注1/地域密着型特別養護老人ホーム
2006年4月の介護保険制度改正に伴って導入された「地域密着型サービス」の一環で、入所定員が29人以下の小規模な特別養護老人ホーム。原則として事業所が所在する市や町の住民のみが入所の対象となる。

「トイレをわざとベッドから離して、少し歩いていただくかなあと。お年寄りにはトイレに行く回数が多いので、知らず知らず下肢筋力が強くなり、元気になるかもしれません」

ちなみに、松下さんは最近、高齢者の排泄行動を調べるため、使用者に協力をお願いし、便器に取り付けた機械で使用状況を詳細に記録しているという。それによると、個人差は大きいですが、なかには朝の2〜6時のあいだに1時間おきで、1日に計18回トイレに行く人もいて、1回に20〜30分座る人も珍しくないというから驚きだ。いかに高齢者にとってトイレが重要であるかがわかる。

伊藤さんは、反省と期待を込めてこう述べる。

「今回は時間切れで、とりあえず従来のプランに取り込んだだけで終わってしまいました。かつて汲み取り式の時代には廊下の突き当たりにないとあかんかったトイレの位置が、

水洗になったことで変わったように、このトイレができたことで、建築の新しい平面が生まれたらいいなと思っています」

伊藤さんとともに設計を担当した丸川景子さんは、試作品を設置している施設の女性理事に聞いた話が印象に残っているという。

「いかにもトイレがいきなり部屋に置いてあるように見えるのは違和感がある。普段は隠しておいて、使うときだけ引っぱり出してくるとか、あるいは置いてあってもトイレであることがわからないような家具のようなのができるといい、とおっしゃっていました」

大きな一歩を踏み出した「ベッドサイド水洗トイレ」ではあるが、まだまだ進化の余地がありそうだ。次なる新製品の開発に余念がない松下さんは「次作に期待していただくさ」と、笑顔とともに自信をのぞかせた。

地域密着型
特別養護
老人ホーム

「このか」

Kokonoka

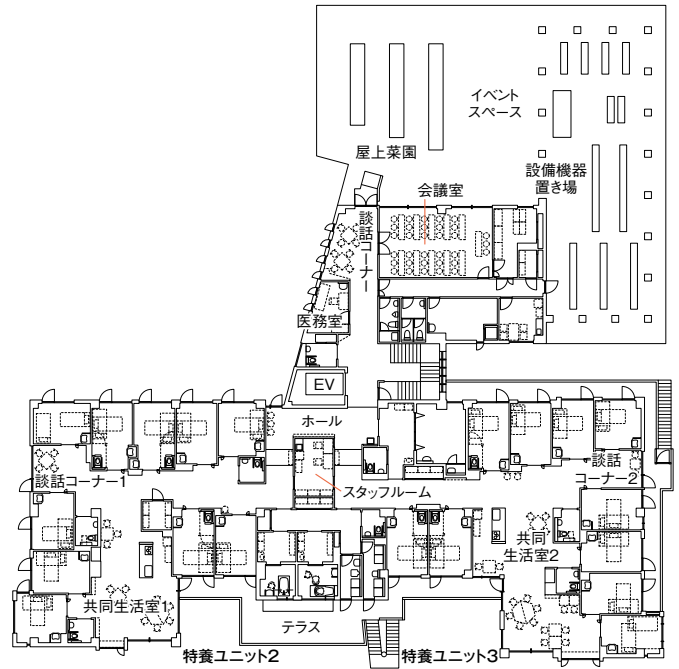
建築概要

所在地	兵庫県豊岡市九日市上町785
主要用途	特別養護老人ホーム・ ショートステイ・ デイサービスセンター・ 居宅介護支援事業所
事業主	社会福祉法人あそう
設計・監理	ゆう建築設計
施工(建築)	中川工務店
施工(設備)	高山設備
敷地面積	2,700.38㎡
建築面積	1,390.66㎡
延床面積	2,306.82㎡
構造	鉄骨造
階数	地上2階
設計期間	2012年9月～2013年3月
施工期間	2013年6月～2014年2月
開業	2014年4月

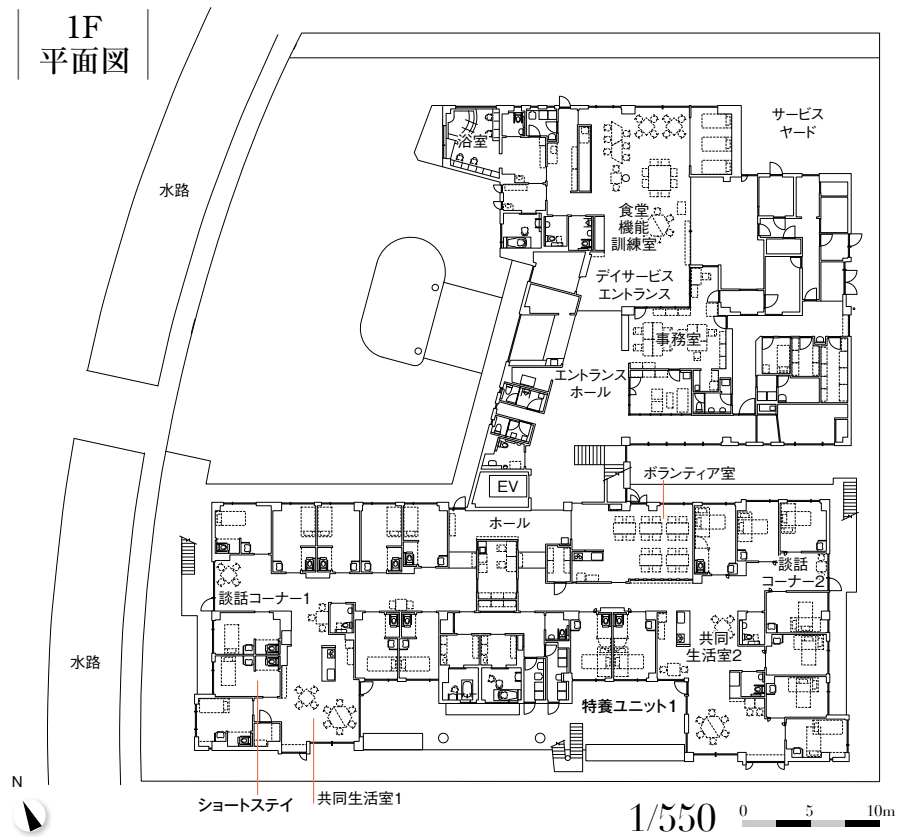
おもなTOTO使用機器

1階	
車いすトイレ	大便器CS220B/ 暖房便座TCF116/ 壁掛手洗器L30D/ 自動洗浄小便器UFS800CE (車いすトイレ2のみ)
男子トイレ	大便器CS220B/ 暖房便座TCF116/ 自動洗浄小便器UFS800CE/ ハイバック洗面器LSE120AP
女子トイレ	大便器CS220B/ 暖房便座TCF116/ ハイバック洗面器LSE120AP
多目的トイレ	大便器CS220B/ 暖房便座TCF116/ 壁掛手洗器LSE90AAP/ 壁掛汚物流しSK35/ ベビーシートYKA25/ ベビーチェアYKA13
厨房前室・ 洗浄室・調理室・ 下処理室・ 検収室	壁掛洗面器L250C/ シングルレバー混合栓 TKGG31E/ 自動単水栓TEN76G
2階	
特養ユニット居室1 (トイレなし)	車いす対応カウンター MLHE
特養ユニット居室2	大便器CS220B/ 暖房便座TCF116/ 車いす対応カウンター MLHE
特養ユニット居室3	ベッドサイド水洗トイレ EWRS310/ 車いす対応カウンターMLHE

2F
平面図



1F
平面図



TOTO 総合研究所UD研究部 主席研究員 松下幸之助
ゆう建築設計 丸川景子
ゆう建築設計 伊藤健一
「このか」主任介護士 山崎真樹子
「このか」事務長 兼生活相談員 足立崇宏

松下幸之助 丸川景子 伊藤健一 山崎真樹子 足立崇宏



Esaki Mitsuhiko

江寄光彦（えさき・みつひこ）／1944年愛知県生まれ。南山大学経営学部卒業。名鉄百貨店を経て、78年大弘（現エサキホーム）入社。96年にエサキホームに改称し、分譲住宅をおもに手がけるようになる。趣味も「仕事」というまじめな人柄で、「家という生涯の買い物に、いらぬゆとりなどない」をモットーに、広さを追求した住まいづくりを行っている。

思わず「おお」と声が出てしまった。分譲中だった小牧市久保一色のエサキホームの一軒を見せてもらったときのこと。「だいたいみなさん、同じ反応です」

とスタッフの方に笑われてしまったが、おそらく誰でも初めて見るエサキホームの家には驚かされるだろう。とにかく広いのである。

「広さという価値」を追求する家づくり

代表取締役

江寄光彦 さん

地震をきっかけに本格的に参入

サラリーマンをしていた江寄光彦さんが、実家が始めていた不動産会社・大弘に入ったのは1978（昭和53）年のこと。それまでは賃貸経営などが会社のおもな仕事だったそうだが、江寄さんが戻ると時をほぼ同じくして、住宅部門を立ち上げた。江寄さん自身は、事前に知り合いの注文住宅の会社を見聞していて、注文住宅事業の難しさを知っていたから、最初から分譲住宅一本。ただし、そこから少しずつ現在のエサキホームになってきたわけではない。転機は95年の阪神・淡路大震災だったという。

「地震直後から、木造住宅が売れなくなってしまうと、その状態が半年以上も続きました。そ



内部写真はいずれも小牧市久保一色で分譲中のJ棟。右上から、2階洋室、洗面室、ユニットバス、2階トイレ。2階洋室は、主寝室の想定で10畳を超える広さ。左の扉が入り口、右側の扉はウォークインクローゼット。2階にはこのほかに3部屋が用意されている。設備仕様はデザイン性も機能性も考え、信頼のおけるメーカーの製品が丁寧にセレクトされる。





Housing Company

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。



esakihome

Data

(株)エサキホーム
●本社所在地
愛知県一宮市東出町7-1
●電話
0586-46-4600
●代表取締役
江崎光彦
●会社設立
1973年
●従業員数
201名
●事業内容
分譲住宅・分譲マンション・
注文住宅建築設計施工・
土地売買仲介・
住宅リフォーム・
損害保険代理店
●売上高
16,931百万円
(2013年3月期)
●関連会社
(株)エムイー
●URL
http://www.
esakihome.co.jp/
●TOTO使用機器
バスルーム サザナTタイプ
1717サイズ
トイレ(1F) ZJシリーズ
(2F) CS340
洗面所 サクア

取材・文：市川幹朗 写真：山下恒徳

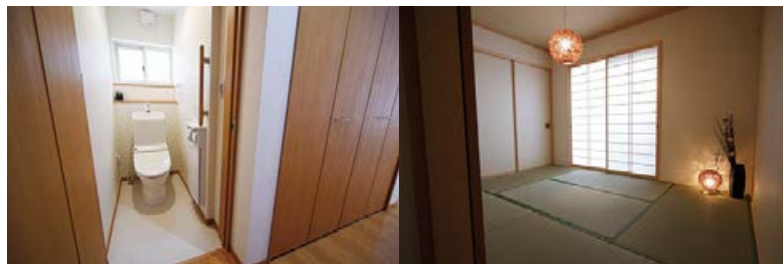
間取りの工夫で、 他社の追随を許さない

エサキホームの最大の特徴は「お値打ち感」。その大きな柱が、冒頭でも述べた「広さ」である。つまり、「この値段でこの広さ！」と思ってもらえる「お得感」が武器となっている。間取りの基本は5LDK。4LDKもつからないことはないが、「やはり5LDKのほうが売れる」という

から、地域特性を見極めたものといえる。具体的に数字を挙げると、LDKは最低でも20畳、2階の個室は10畳1部屋、8畳2部屋、7畳1部屋の33畳以上が標準。少し小さい、10畳+7畳+6畳2部屋というタイプもあるが、それでも十分に広い。実際、南面した10畳のメインベッドルームに入ってみると、「個室」という表現がふさわしくないと感じるほどの広がりを感じる。また、駐車スペースとして3台分確保している家が多いのも特徴だろう。夫婦1台ずつに來客用ということだ。さらに「パントリーは必須にしていますし、ウォークインクローゼットや玄関収納などの収納も」充実。敷地自体が他社と比べて特別広いわけではないが、「設計の工夫」で廊下などを切り詰めて他社の追随を許さない。隣戸との視線のバッティングを防ぐ開口部位置の検討や、まとまった開発でも1戸ずつデザインを変えて個性を際立たせるなど、細かい設計

の配慮も人気の秘密になっている。もちろんお値打ち感は、住宅以外の要素、つまり立地条件などにも大きく左右される。どれくらい交通至便か、周囲の環境はどうか、などなど。5、6戸のミニ開発から100戸単位の大規模開発まで、幅広く手がけるエサキホームでは、条件のよい土地をいかに安く入手できるかがとても重要になる。「銀行の紹介など」で、そうした土地を開発できるのは、長年にわたる実績と信用の賜物ということだろう。

一昨年、昨年と、販売は500〜550戸と安定している。だが江崎さんは、「まだ、たった500戸」と言い、「少し停滞している感じがしています。なんとかテコ入れしたい」と、今後への意欲を見せる。どこに、何を上積みしていくか。安定のなかで、エサキホームは新たなステージに踏み出しつつある。



右ページ上／小牧市久保一色の分譲住宅前にて。ここではエサキホームが計13戸を建売り分譲する。後ろはI棟(左)とJ棟。右ページ下／1階LDK。隣家と接する側の窓(写真右)は、視線がバッティングしないよう位置が調整されている。左2点／1階の和室と1階トイレ。客間にもなる和室は、水まわりの近くに置かれる。左上／J棟正面外観。

TYIN tegnestue
Architects:
Human - Architecture

ティーン
TYIN テーネステュエ・アーキテクト展
Human - Architecture

2014
7/10~9/20

ノルウェーの若手建築家ユニット
TYIN テーネステュエ・アーキテクトによる展覧会を開催します。
地元住民とのワークショップや、
伝統的な構法・素材を取り込むことで、
近代的な西洋建築の枠組みを超えた、文化や環境に
柔軟に対応するTYIN独自の建築手法を紹介します。



クローン・トゥーイ・コミュニティ・ランタン

タイ、バンコク、クローン・トゥーイ/2011

Photo/TYIN tegnestue Architects



セイフ・ヘイヴンの子どもたちのための図書室

タイ、ターク、バーン・ター・ゾーン・ヤーン/2009

Photo/Pasi Aalto



バタフライ・ハウス

タイ、ターク、ヌボ/2009

Photo/Pasi Aalto

建

築は、多くの人に開かれたものだと思う。ひとりですらこつこつとデザインを描き上げたあげく、その実現を見届けもせずにあっさり手放してしまうような建築家もいるが、私たちにはどうしてそんなまねはできない。むしろ自分たちのアイデアやデザインが、雑ばくな理論でしかないようなものから、やがて実体を伴った構築物として、この世に実現されるまでの道のりのなかで、どのように変わっていかを見届けたい。

まさにこの道を通じて、建築はつくられていく。たとえば世の中の現実からさまざまな要望や機会を与えられ、それに応えていくことによって。かわった人々のあいだでもまれるうちに、未熟だったアイデアが成熟していくにつれて。そして、私たちが手を動かしてデザインを構築体に近づけるにつれて。

私たちは、この流動的でオープンエンドなアプローチを「Architecture of Pragmatism(実用の建築)」と呼ぶことにした。たとえばプロセスを固定しないほうが柔軟な発想ができるし、ほかの人の目には制約に映るものもチャンスにみえてきたりする。

私たちの建築観も、各々のプロジェクトの成り立ちとともに形成されていった。世界各地を旅して異

Human-Architecture

文/TYIN テーネステュエ・アーキテクト

伊東豊雄展

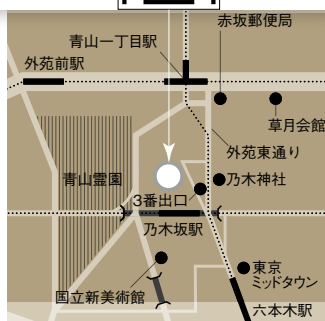
世界が注目する建築家・伊東豊雄が挑み続ける「台中メトロポリタン・オペラハウス」。いよいよ最終局面を迎えているこのプロジェクトの、2005年から9年間にわたる軌跡を紹介します。

会期	2014年10月17日(金)～ 12月20日(土)
講演会	10月29日(水) よみうりホール ※事前申し込み制 詳細は8月中旬、 TOTOギャラリー・間 ウェブサイトにアップします。

TOTO
ギャラリー・間

所在地	東京都港区 南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル3F
電話	03(3402)1010
ファクス	03(3423)4085
開館時間	11:00～18:00
休館日	日曜日・月曜日・祝日、 および、展示替え期間、 夏期休暇(8月9日～18日)、 年末年始
入場料	無料

アクセス	●東京メトロ千代田線 「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線 「六本木」駅下車 7番出口徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線 「六本木」駅下車 4a出口徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・ 半蔵門線、都営地下鉄 大江戸線「青山一丁目」駅 下車4番出口徒歩7分
------	--



TYIN tegnestue Architects

TYIN (ティーン) テーネステュエ・アーキテクトゥ／2008年設立。ノルウェーのトロンハイムに拠点を置き、アンドレア・G・ゲールセン(1981年ノルウェー・トロンハイム生まれ)とヤシャー・ハンスタッド(1982年イラン・テヘラン生まれ)により運営されている。Global Award for Sustainable Architecture金賞(2012)をはじめ、ノルウェー、スウェーデン、英国、イタリア、タイなどで数々の建築賞を受賞。現在、トロンハイムのノルウェー科学技術大学(NTNU)で実践を通じた教育活動を行うほか、世界各地で講演や展覧会、ワークショップを行っている。



Photo/Pasi Aalto



リスタの光

ノルウェー、ファーシュン、リスタ／2013

Photo/Pasi Aalto



アウレ郊外のポートハウス

ノルウェー、ムーレ・オグ・ロムスダール、アウレ／2011

Photo/Pasi Aalto

文化や未知の出来事に遭遇するたびに、私たちはそれまでの考え方や先入観をあらためることになった。こうした旅を通して実感したのは、建築とはそもそも二元的なもので、その物質的側面と社会的側面とが車の両輪のように分かちがたく並存し、全体を形づくっているということだ。これは、私たちが建築の仕事を通じて得た、唯一最大の知見かもしれない。

本展では、私たちの仕事の根幹をなしているもの、つまり私たちがよりどころとしている理念、そして私たちが行き着いた自由で柔軟なプロセスをお見せしたい。原寸大の模型と写真を通じて、初期の「パタフライ・ハウス」からノルウェー国内で手がけた最新のプロジェクトに至るまでの仕事を具体的に紹介する。また模型や写真と併せて、TYINの仲間や友人たちも紹介したい。彼らは、それぞれの専門的な職能を代表している人たちである。人的なネットワークが重要な「ツール」であるTYINの仕事にとって、彼らの存在はかけがえのない貴重なものなのだ。

本展を、こうした仲間や学生たち、実務を担った職人たち、そしてそれぞれの地域のコミュニティに捧げる。彼らの力なしにはどのプロジェクトも実現し得なかった。建築はこの先、個々の建築家の手を離れてそれにかかわったすべての人々の手と心とを思いを通じて熟成していく、そしてその真価を発揮していくことになるだろう。



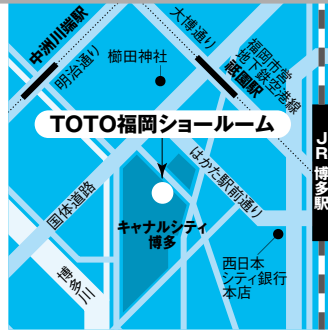
TOTOの最新情報

TOTO News 1

TDY福岡コラボレーションショールーム 3社一体のショールームとして リニューアルオープン

TOTO、DAIKEN、YKK AP (以下TDYという) の3社は、2012年7月に開設した「TY福岡コラボレーションショールーム」にDAIKENショールームを加え、「TDY福岡コラボレーションショールーム」として14年6月にリニューアルオープンします。3社一体のシ

ョールームになることで、お客さまにワンストップでTDY商品をご覧いただくことができます。「TDYグリーンリモデル空間展示コーナー」の活用など、よりいっそう3社の連携を強化し、さらなるお客さま満足の向上を目指します。



TDY福岡コラボレーションショールーム

●所在地／福岡県福岡市博多区住吉1-2-25
キャナルシティ・ビジネスセンタービル3F●電話
／092(272)1089(TOTO福岡ショールーム)
●営業時間／10:00～17:00●アクセス／福岡市営地下鉄空港線「祇園」駅より徒歩10分、
「中洲川端」駅・JR「博多」駅より徒歩15分、西
鉄バス「キャナルシティ前」より徒歩5分●休館日
／水曜日(祝日を除く)・夏期休暇・年末年始

TOTO News 2

「iFデザイン賞」 「レッドドット・デザイン賞」を 受賞しました



TOTOの海外向け水栓金具、ウォシュレット一体形便器、バスルームシリーズが「iFデザイン賞」「レッドドット・デザイン賞」を受賞しました。両賞は、権威ある国際的なデザイン賞で、毎年50カ国以上、数千を超えるアイテムがエントリーされ競われています。受賞した商品は、除菌やエアインなどの独自の高い技術や機能、デザイン性がすぐれたプロダクトとして高く評価されました。

「iFデザイン賞」受賞商品

「NEOREST GH/XHII/750H」
「CI CONTEMPORARY Faucets」
「C SERIES LAVATORY/BATH」

「レッドドット・デザイン賞」受賞商品

「Overhead Shower」
「Hand Showers」
「CI CONTEMPORARY Faucets」
「CII CLASSIC Faucet」

写真左／ダブル受賞の「CI CONTEMPORARY Faucets」
写真右／新技術搭載のウォシュレット一体形便器「NEOREST GH/XHII/750H」



TOTO News 3

「TOTO CORPORATE REPORT 2014」を 発行しました

TOTOグループの企業活動全般を紹介する「TOTO CORPORATE REPORT 2014」を発行しました。企業理念から、100周年に向けた長期ビジョン「TOTO Vプラン2017」まで、TOTOグループの事業活動や目指す姿を、あらゆるステークホルダーのみなさまにわかりやすく

お伝えすることを目的とした冊子です。一般の方により親しんでいただけるよう、わかりやすくエッセンスを詰め込んだ小冊子も発行しました。TOTOホームページではPDFでの閲覧や送付申し込みができるほか、CSR活動などの詳細情報を開示しています。

TOTO News 4

TOTOのユニットバスは 50周年を迎えます



ホテルニューオータニに納入した業界初のユニットバス

1964年TOTOのユニットバスは、東京五輪開催を控え建設された「ホテルニューオータニ」向けに誕生。以来、一般家庭にも普及し、「魔法びん浴槽」「ほっカラリ床」など、新しいご提案をして参りました。これからも、よりいっそうお客さまに喜ばれる商品づくりを心がけて参りま

す。今後とも弊社商品をご愛顧いただけますようお願い申し上げます。

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など
知っておいていただく
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

CERA
TRADING

Cera Trading News

Book

TOTO出版

セラのお知らせ

TOTO出版のお知らせ



Book 1



Book 2



Book 3

『ヤコブセンの建築とデザイン』

今なお愛され続ける北欧の巨匠、アルネ・ヤコブセンのプロダクトデザインは、じつは自らが設計した建築作品のためにデザインされたものでした。本書は建築家としても数々の作品を残したヤコブセンのトータルデザインの奥深さを体感できる一冊です。ヤコブセン建築を長年にわたって撮り続けた建築写真家・吉村行雄氏による美しい写真と、北欧デザインに造詣の深い工学院大学教授・鈴木敏彦氏の解説により、ヤコブセンの日本初の作品集として充実した内容に仕上がっています。

- 写真: 吉村行雄
- 文: 鈴木敏彦
- 定価: 4,600円+税
- 体裁: B5判変型(190×250mm)、ハードカバー、328ページ、和英併記



『ビハインド・ザ・ラインズ TYIN テーネステュエ』

30代前半のノルウェーの若手建築家ユニット、TYIN テーネステュエ・アーキテクトを日本で初めて紹介する書籍です。彼らの野心的で行動主義的な建築活動が、今世界中から注目を集めています。建築学部の学生時代から現在に至るまで、彼らがどこでどのように建築を考え、今を迎えているのかがひとつの物語となっています。また最新のプロジェクトまでを写真や図面で紹介しています。

プレゼント

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方の中から、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

- 著者: TYIN テーネステュエ・アーキテクト
- 定価: 2,000円+税
- 体裁: A5判(148×210mm)、ソフトカバー、240ページ、和英併記
- 発行日: 2014年7月9日

『水の世界戦略』

本書は、地球温暖化対策の技術として「節水」に焦点を当て、節水型の都市づくりを提案しています。すでに上下水道システムが整備されている先進国と、今、水インフラの整備を進めつつある発展途上国では、経済と環境に配慮した「水の世界戦略」が異なります。今後の都市づくりの判断材料となるよう、さまざまな調査結果や、実際に展開した事例を紹介しています。

- 著者: 清水康利
- 定価: 2,500円+税
- 体裁: A5判(148×210mm)、ソフトカバー、160ページ(予定)
- 発行日: 2014年8月20日

日本のバスルームにぴったりのバスタブを発売しました



CEY21400V6
193,320円(税込み)

セラレーディングでは、海外バスタブのデザイン性と日本古来の入浴文化を

かけ合わせた「セラオリジナルコレクション」を発売しました。日本の浴室にマッチする1400mmのコンパクトサイズ、ヘッドレストが極上のリラックスタイムを演出するタイプなど多彩なバリエーションのバスタブをご用意しています。日本の入浴習慣に配慮したオーバーフロー穴なしタイプを品揃えしているため、肩までお湯に浸かってゆっくり入浴をお楽しみいただけます。カタログのご請求は、セラレーディングホームページ、またはファクスにてお申し込みください。

CEY21640V6 213,840円(税込み)



→ www.toto.co.jp/publising

→ www.cera.co.jp

『TOTO通信』定期購読をご希望の建築家をご紹介します。

お申し込みはTOTO通信データ管理室まで

電話/093(513)6234

e-mail/toto_tsushin@jlink-net.com

*法人あての送付となります。

セラレーディング	Bookshop TOTO	TOTO出版	TOTO乃木坂ビル
cera trading	Bookshop TOTO	TOTO publishing	
●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル 1F・地下1F ●電話/03(3402)7134 ●営業時間/10:00~17:00(日曜日は予約制) ●定休日/月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始	●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2F ●電話/03(3402)1525 ●定休日/日曜日・月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・夏期休暇・年末年始	●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2F ●電話/03(3402)7138 ●ファクス/03(3402)7187 全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めいただけます。書店遠隔の方はお問い合わせください。	

アクセス/●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2014年10月上旬発行の予定です。

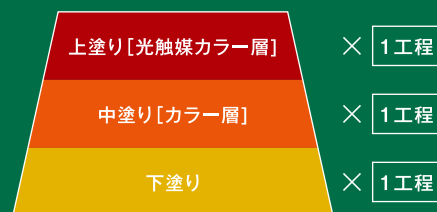
カンタンに

なりました。



4工程から3工程へ！ カンタンに塗れる光触媒塗料が登場。

光触媒塗料、興味はあるけど工程が複雑で面倒…そんな方々に朗報です！
一般塗料と同等のシンプルな3工程*で、ぐんと施工しやすくなったECO-HGが
TOTOハイドロテクトコートより誕生しました。



*当社従来比 (ECO-SP)。仕様により工程数が増える場合があります。

キレイがつづく、よりお求めやすくなった*ECO-HG *当社従来品比 (ECO-SP)

光触媒の防汚性能を持ちながら、アクリルシリコン塗料に近い価格を実現しました。

HYDROTECT COLORCOAT “ECO-HG” DEBUT!



商品のお問合せ・ご相談は TOTOエクセラ株式会社 [本社] TEL 03-6423-1341

TOTOエクセラ(株)はTOTOハイドロテクトコート総代理店です。
営業日:月~金 9:00~17:00(土・日・祝日・夏期休暇・年末年始は除く)

塗料・コーティング材に関する詳しい情報はこちらをご覧ください。》ハイドロテクトコート専用サイト》 <http://www.hydrotect.jp/>

【TOTO通信】のお届け先などの変更はお客様No. (封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(513)6234 FAX.093(571)0999
*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客様からお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。